第３回　ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会

令和２年１０月２７日（火）

【田中課長補佐】　　それでは、定刻となりましたので、ただいまからライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会の第３回会議を開催いたします。

私は、事務局を務めております国土政策局総合計画課の田中でございます。本日はお忙しい中御出席いただきまして、誠にありがとうございます。事務の関係でお伝えすることがございますので、その間はしばらく私のほうで司会を務めさせていただきます。カメラ撮りが必要な方々におかれましては、この時間にお願いいたします。

会議の冒頭につき、本日の会議の公開について申し述べさせていただきます。本会議は公開いたしますが、新型コロナウイルスの感染防止の観点から、マスコミ関係者のみに傍聴していただいております。議事録につきましては、後日ホームページ上で公表させていただきます。この点につきまして、あらかじめ御了承くださいますようお願いいたします。

それでは、カメラ撮影はここまでとさせていただきます。今後の撮影は御遠慮いただきますようお願い申し上げます。

事務局から議事に入る前の説明等につきましては、以上でございます。これ以降の議事運営は座長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

【小田切座長】　　了解いたしました。それでは改めて、皆様どうぞよろしくお願いいたします。今日は３回目ということなんですが、今回の３回目と４回目がセットになっているという、この種の会議では少し珍しい形になっております。共通するテーマは、地域と関係人口のつながりです。いろいろ議論させていただいておりますが、関係人口と地域がどのようにつながるのかということは、恐らく政策的に見ても最大の論点だろうと思います。そんなこともあって、２回にわたって議論をさせていただくということになります。

会議の進め方は、まず冒頭に第２回目の懇談会の議論の振り返りを行いたいと思います。その後、多くの方々が注目されていると思いますが、インターネットアンケートによる関係人口の実態把握、この速報値が出てきておりますので、これも御報告をいただきます。そしてその後、メインテーマの議論に入っていきたいと思います。よろしいでしょうか。

それでは事務局から、まず前回の議論の振り返りをお願いいたします。

【小田桐企画官】　　それでは私から、前回の懇談会における委員の主な意見ということで

振り返りの御紹介をさせていただきます。事務局説明資料の１ページ目を御覧ください。

前回の懇談会では、大きく分けまして４つほど御意見があったかと思っています。１つ目は、関係人口と県人会・同窓会ということで、関係人口と県人会・同窓会の関係性を整理する必要があるのではないかということで、これは後ほど資料をもって御説明をさせていただきます。

２点目に、関係人口となるきっかけということで、関係人口の拡大には、地域との出会いの偶発性を生み出すことが必要ではないか。あるいはそのきっかけとして、個人的な興味などの内部的な要因、あるいは業務上関わったことがある等の外部的な要因、この２つに大別できるのではないかという御意見をいただいております。また、都市側は自分のスキルを生かしたいと考えているけれども、どう生かせばいいか分からないことから、地域の側から「関わりしろ」というものを示していくことが重要ではないかという御意見をいただいております。

２ページ目に移っていただきまして、３点目、地域と関係人口の出会いにおける偶発性の創出ということで、多くの人が集まる場所、いろいろなジャンルの方が集まる場所ということで、例えばカフェですとか、商店、飲食店等々ということかと思いますけれども、こういったところでは遭遇率が上がるため、偶発性が生まれる可能性が高いのではないかという御意見がございました。また、活動の息遣いを感じてもらうことが重要ということで、そういった自発的に関わりたいと感じてもらう、見てもらうということが重要ではないかという御意見をいただきました。また、災害、イベント等においても、地域と人の接点が生まれる可能性もあるのではないかといった御意見をいただいております。

４点目に、取組の継続性の確保ということで、地域づくりやつながりのサポートにおいては、キーマンが属人的な場合になることが多いことから、キーマンの入れ替わりを許容することが大事ではないか、重要ではないかという御意見をいただいています。

先ほどの県人会と同窓会の関係の整理ということについて、資料４ページ目に比較する形でまとめておりますので、御覧ください。右上に関係性のイメージという概念図を掲載しておりますけれども、県人会はどちらかといいますと、その地域に住んだことがあるなどの地縁を持つ人から構成される懐古的、階層的かつ組織的なコミュニティーである一方で、関係人口は、地縁を含む場合もございますが、地域に何らかの興味がある人や活躍の場所を求めている人から構成されるテーマコミュニティーではないかと、大きく大別できるのではないかと考えています。

また、地域の内発的発展への寄与という点に関しては、関係人口のほうがその性格上、より直接的ではないか。一方で県人会等というのも、地域と関係性のあるメンバーが集まっている可能性がありますので、県人会等のメンバーと地域との関わりを深めていくことも重要ではないかと提起をさせていただきたいと思っております。

私からは以上です。

【小田切座長】　どうもありがとうございました。前回の振り返りということで、このようにまとめていただきました。特に関係人口と県人会のところは、いわゆる宿題返しということで、我々の議論で宿題として残したものについて、事務局としての見解をまとめていただいたということになります。全体を通して、皆様方からの御意見や御質問はありますでしょうか。よろしいですか。

私から１点だけ確認の意味で、４ページ目に、県人会の真ん中、参加の意思の欄が「参加要請が多数」という意味が書いてあって、これは参加を要請されて、そして参加するのが多数という意味合いでしょうか。

【田中課長補佐】　そのとおりでございます。

【小田切座長】　難しい言葉になっているために、何かやらせのような形で参加するとか、そういうことでは決してないということですね。確認させていただきました。

ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

石山委員、お願いします。

【石山委員】　もしこの中で、県人会の中でも先進的な事例等が出ているところがあれば、ぜひお伺いしたいと思っていたんですけれども、もし委員の中で御存じの方がいれば、お願いします。

【小田切座長】　岡本室長、お願いいたします。たまたま事例があるようですので、お願いいたします。

【岡本委員】　資料２を見ていただけますでしょうか。今回事例として、もともとは地縁的な事例だったけれども、それが関係人口的なものになっていくという一つの例としまして、今ここで「若い鳥取応援団」と言っていますけれども、１文字抜けておりまして、「若い鳥取県応援団」ということで、「県」という字が入ります。

こちらは、鳥取県出身の２０代から３０代の若者たち１００名ぐらいが団体をつくっている例ですけれども、きっかけはいわゆる地縁的なつながりで、いわゆる同窓会的になるのですけれども、それに加えて、地域の特色であるとかを紹介するイベントを行ったり、体験

会を行ったり、もしくは地域の、鳥取県に今いる特色的な経営者等から話を聞いて、そういうのを応援する取組を行っています。

その結果として、鳥取県への関係を再度深めていくということですけれども、これはどちらかというと、地域から一回出て、同窓会的なものになって、それをまた関係人口に再構築していくという一つの流れの例ではないかなと思っております。ということで、一例を紹介させていただきました。

【小田切座長】　ありがとうございます。そうすると、ネオ県人会、これは嵩さんがかつて紹介していただきましたが、そういう新しいタイプの県人会が第三類型として登場するようなイメージを持ってよろしいでしょうかね。この辺りはいかがでしょうか。それでよろしいでしょうか。

それでは、この表に、もう１段増やしていただいて、今、岡本室長からお話があったようなものを位置づけていただくことをお考えいただければと思います。

ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、２番目の議題に入っていきたいと思います。インターネットアンケート調査の概況ということで、これも小田桐企画官から御説明をお願いいたします。

【小田桐企画官】　それでは、関係人口の実態把握のアンケートの速報値について御説明をさせていただきます。事務局説明資料の５ページ以下になります。冒頭に、データの取扱いについて留意点を申し上げますと、今回提示させていただくものにつきましては、あくまでも速報値ということで、今後の検討によって数値を見直す場合もありますので、その点、御留意をいただければと思います。

６ページ目が、今回のインターネットアンケート調査の概要となります。昨年の三大都市圏の試行を踏まえまして、今回、三大都市圏の都市部とその他地域ということでアンケートを行いまして、回収結果につきましては、全体で１４万９，５２２サンプル、うち二次調査は３万８，６２３サンプルということで、二次調査につきましても、本来、所期の目標に近い数字が取れているのかなと考えております。

調査のフローにつきましては、変わっておりません、７ページを御覧ください。８ページ目、地域の区分につきましても、こちらの表に掲げさせていただいているとおりでございます。９ページ目以下が速報値になります。

まず９ページ目は、関係人口の存在、こちらは三大都市圏の速報値になります。三大都市圏の都市部の１８歳以上の居住者のうち、約１８％、１８．３％が関係人口として、日常生

活圏、通勤圏等以外の特定の地域を訪問しているのではないかということで、全体の数字から戻しますと、約８５８万人という数字になろうかと思います。ちなみに、関係人口の非訪問系が約２．６％、また地縁・血縁的な訪問者というのは約５．６％といった数字になっております。

めくっていただきまして、１０ページ目が、今度はその他の地域の速報値になります。こちらにつきましては、その他の地域の１８歳以上の居住者のうち、約１６％、１６．２％が関係人口として、いるのではないかということで、こちらも数字を全体のものから推計しますと、約９６４万人という形になります。三大都市圏もその他の地域も、どちらも大体同じような傾向かなと考えております。また、昨年試行的に行いました調査と若干、大枠では同じような傾向かと思いますけれども、細かい数字の違い等があるものについては、また精査して御報告をさせていただきたいと考えております。

１１ページ目が、新型コロナウイルスの感染拡大が関係人口に及ぼした影響ということで、訪問系、直接寄与型に関する速報値という形になっております。結果を申し上げますと、地域との関わり方に変化はないという回答が最も多くて約４０％で、続いて、地域への訪問の頻度が減少したという方が大体３割ぐらいいらっしゃるという形になっております。そういった中でも、地域への直接の訪問を自粛または休止しているものの、非訪問系の関わり方をしている方が一定数いらっしゃることが確認されていました。地域との関わりを自粛または休止したという方は、全体の１０％ぐらいになっております。

続いて、１２ページになります。関係人口のコロナ禍収束後の意向というものについても速報値をまとめております。関係人口の関わりを続けたいという回答が全体の６０％強、どちらかといえば続けたいという回答が大体２５％ほどありまして、両方足し合わせますと、大体９割ぐらいの方は続けたいという御意向を持っていらっしゃるのかなというふうに速報値が出てきております。

１３ページ目が、地域との関わりを継続したい理由に関する速報値でございます。こちらは三大都市圏及びその他の地域ともに、続けたい理由として最も多いのが、楽しい、リフレッシュできるということで、これが３割強と最も高くなっております。続いて、家庭の事情ですとか地域との関係性があるということも多く確認しております。いろいろな人との出会いやつながりがあり、共感を得ることができるとか、人との出会いとつながりをサポートしてくれる人がいると回答された方も一定数いらっしゃいまして、地域との関わりを継続していく上で、関係案内人ですとか中間支援組織が重要ではないかということが考えられ

ます。

１４ページになります。こちらは、関係人口が地域との関わりを継続する上での阻害要因ということで、訪問系、直接寄与型に関する速報値になります。今後の見通しがつかない、及び、コロナ禍で地域との関係性が悪化したという回答は一定数確認されておりまして、新型コロナウイルスの感染拡大の影響が一定程度確認されるのかなと考えております。また、回答の中の１ポツの部分になりますけれども、その他地域と比較しまして三大都市圏で、時間的な負担が大きいという回答が、特に差が出ておりまして、三大都市圏のほうが時間的な負担が大きいという割合が高くなっております。

最後に、１５ページになります。関係人口の関わりの深化の方向性ということで、これも訪問系、直接寄与型の速報値でございますが、三大都市圏及びその他の地域ともに、地域とのコミュニケーションを深めたいとか、より多くの人とのつながりを持ちたいという回答をされる方が多く、関わりの深化を求める傾向が強いと。一方で、今以上の関係性は求めていないという回答をされる方も多くて、関係人口（直接寄与型）であっても、関わりの深化を求めていない人も一定数存在するのではないかという結果になっております。

アンケートの結果について、御報告は以上でございます。

【小田切座長】　　どうもありがとうございました。よろしいでしょうか。

それでは、このアンケートの読み方、あるいは場合によったら、次回までにあまり時間がありませんので、できないかもしれませんが、最終的にはこのような組替え集計といいましょうか、深掘り分析が考えられるのではないかなどという提案も含めて、ここで御議論いただきたいと思います。

１つ目の議題が比較的コンパクトに議論できたということもあって、かなり時間が取れます。おおむね２時４５分ぐらいまで、３０分前後の時間を取れると思いますので、各位から御意見いただきたいと思います。

まず谷口先生、打合せも何もなくて大変恐縮なんですが、読み方の注意や、あるいは今までの御経験から、１５万サンプルという、多分私が知っている最大のサンプル。

【谷口委員】　　いや、僕も最大。

【小田切座長】　　巨大サンプル。この辺りも含めて、少し解説的にお話をいただいてよろしいでしょうか。打合せを全然せずに申し上げます。

【谷口委員】　　いえいえ。どうもありがとうございます。大変な調査だったかと思いますので、田中さんはじめ、事務局の方は大変御苦労されたんじゃないかなと思います。私自身

もまだデータを触らせていただいているわけではないので、差し支えなければこの後、データを直接分析させていただければと思っているんですが、今日はここで見させていただいた結果から感じたことと、これからのこととかを何点か、まだ整理できていないんですけれども、順番にお話しできればと思います。

まず、９ページ、１０ページなんですけれども、大体こんな感じなのかなとは思うんですが、傾向としては、コロナ禍で調査をしたために、回答が若干萎縮している可能性があるかなと思っています。事務局サイドで作っていただいたアンケートは、ちゃんとコロナでない状況を想定して回答してくださいということを前提で、かなりしつこく書いてくださっていたんですけれども、若干、もうちょっと数字が出るかなという感じはしたんですが、それよりは、例えば地縁・血縁的な訪問者とかというのは、本来もうちょっと出るはずなんですけれども、これはちょっと少なめに出ているのかなと思います。

あと、最初に想定したとおりかなと思ったことは、三大都市圏とその他地域の数の関係とか比率の関係なんですけれども、数的には、三大都市圏とその他地域で大体同じぐらいの数の人が関係人口として活動しているんじゃないだろうかという、想定というか仮説を持っていたんですが、それは大体そういう数になっているということと、あと、三大都市圏よりは地方の方のほうが、関係人口の割合としては、ちょっと活動しにくい面、それこそ後ろのほうでデータがありましたけれども、家族の了承が得にくいとか、やはり大家族の状況がまだ地方のほうが残っていますので、割合的には若干低くなるかなと思ったんですが、そういう比率ですね。１８．３％、１６．２％、そういうことも割と最初の予想どおり出てきているかなと感じています。

後ろのほうの基礎集計も、１１ページ以降、大体想定されたような結果が出てきているのではないかなと思っていて、地方と三大都市圏とで差が出るかなと思ったところとかは、１４ページ辺りですよね。１４ページ辺りで、都会の方のほうが時間的負担が大きいと感じているとか、それから、先ほども言いましたけれども、７番の同居の家族の影響とかを配慮するのは、地方の方のほうが気になるとか、その辺りの違いというのは、なかなか割と出ているのかなと感じています。

今後の分析の話としては、まだこれは、小田切先生がおっしゃったように、サンプルが十分、数が取れておりますので、もうちょっと地方を分解する。例えば、地方間での行き来のパターンとか、そういうものは十分分析できると思いますので、全国で見たときの行き来のパターンというものは、かなり貴重なアウトプットがここから出てくるんじゃないかなと

感じています。

取りあえず、そこまで。

【小田切座長】　整理して話していただいて、ありがとうございます。

一番最初に言っていただいた、データが萎縮しているのではないかというのは、私も同様に推測しているところであります。統計にはユージュアルメソッドとアクチュアルメソッドと、２つの捉え方がありますが、ふだんの状況、つまりユージュアルを聞いているんだけれども、現実には回答者が今の状況、アクチュアルを答えちゃっているんですね。そういうことがあり得るということですね。

それからもう一つは、１５万という本当に巨大サンプルということもあって、やや薄まった数字が出てきているという可能性もあって、谷口先生、この見方としては、例えば関係人口の数にしても、ミニマム水準が出ている。推計しても、少なくともこれより大きいだろうという数字が出ているという解釈をしてよろしいでしょうか。

【谷口委員】　はい。そういう意味では、控え目に出たと。この状況下なので、それは全然問題ないと思います。

【小田切座長】　なるほど。したがって、これ以下であることは、ほぼないと。

【谷口委員】　ないと思います。

【小田切座長】　ということですね。そんなふうに、逆にそのように読める数字が出てきて、いろいろな議論の素材となろうかと思います。過大推計がされていないということは、非常に重要なことだと思います。

それでは、あとは自由に御議論をお願いしたいと思います。中島委員、お願いいたします。

【中島委員】　今回のコロナの影響を受けているということを考えたときに、これだけのサンプルがあるということで考えると、回答してくださった方々の、取れているか分からないんですが、年収であったりとか、お仕事の内容であったりとか、そういったところで少し違いであったりとか、差が出てきてもおかしくないなと思っていたりしています。取れるデータがどこまでなのかにもよるんですけれども、これだけのサンプルがあるので、そこを聞き取った数値で、より具体的に捉えられるようになるのではないかなと感じています。

【小田切座長】　ありがとうございます。

これは、田中補佐、回答者属性についてお願いいたします。

【田中課長補佐】　属性につきましても、年齢、性別、収入、職業等のデータを取得しておりますので、そちらに基づいた分析は可能になっておりますので、後ほどお示ししたいな

と思っております。

【小田切座長】　　重要な視点、切り口をありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。嵩委員、お願いいたします。

【嵩委員】　　今の質問に少し重なりますけれども、データとして、これは出身地、あるいは祖父母の居住地とかというような属性は聞かれていますか。

【田中課長補佐】　　今回、出身地のデータは取っておりません。よって、その観点からの分析は難しいと思います。

【小田切座長】　　ほかにいかがですか。岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　　１４ページの阻害要因のところの１０番、コロナ禍で地域との関係性が悪化したためというところで、ここのところが地域のほうが多いという状態になって、これは地域側では気になっていることでして、こちらは行動される側ということなので、恐らく家族構成的な部分で大家族になって、家族の中に御高齢の方がいらっしゃるとか、または小さなお子さんがいらっしゃるということもあるかと思うのですけれども、逆にそれが、都市部から受け入れるというときでも、今は結構、交流行事とかになると、今回は参加を見合わせていただくみたいなお話に実はつながっておりまして、結構これは大きな要因だと思うのですけれども、家族構成とかというのは今回のデータで分かるものなのでしょうか。

【田中課長補佐】　　独身かとか、夫婦かとか、子供はいるかとか、親世帯と同居しているかぐらいのレベルでは、分かるようにはなっております。

【岡本委員】　　ありがとうございます。

【小田切座長】　　今の家族関係が分かるというのは、大変重要な点ですね。岡本委員、ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　　質問なんですけれども、三大都市圏以外の人が、どこの県の人がどこと関わっているかというのとかも、全部分かるようになっているんでしょうか。

【田中課長補佐】　　はい、そのとおりでございます。

【多田委員】　　あともう１個、これは少し表現の問題なんですけれども、１４ページのタイトル、関係人口が地域との関わりを継続する上での阻害要因というのが、Ｑ２－１９、続けたくないと思う理由を答えてくださいというところを読んで、そこから戻ってきたら、これはコロナウイルスが原因でと分かったんですけれども、今後の見通しがつかないためという理由が、それをぱっと見たときに、何かよく分からなかったので、このタイトルのとこ

ろに、コロナウイルスによって関係人口の関わりを継続するのが難しくなった要因とか、ちょっと分かりやすく書いたほうがいいのかなと思いました。

【田中課長補佐】　　こちらにつきましては、特に上の選択肢を見ていただくと、別にコロナと関係ないような選択肢もございまして、今後の見通しがつかないためというのは、主には、現状を考えればコロナの影響が大きいかと思いますけれども、それ以外の要素も含んでいるという理解だと思います。

【多田委員】　　なるほど。ここがいまいち意味が分かりづらかったなと思ったということです。見通しがつかないのは、上にコロナの１０番があったから、コロナのあれなのかなと思ったんですけれども、見通しがつかないというのはコロナ以外も含むとなると、また余計、逆に意味が分からないというか、回答した人が何をもってここに丸をしたのか、ちょっと分かりづらいなと思ったという。

【小田切座長】　　ここを最終的に解明していく手法というか、何かありますかね。最終的にクロスしていけば、何となく見えてくるんでしょうか。

【田中課長補佐】　　そうですね。他の選択項目とクロスで見ていくという方法があると思います。コロナ禍に係る対応状況で、地域との関わりを続けたいとか、続けたくないとかという質問項目がありますので、この辺りの質問項目とクロス分析をしていけば、ある程度傾向は分かるかなと思いますので、その点は分析を進めていきたいと思います。

【小田切座長】　　岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　　すいません。今の議論に関連して、同じくコロナだけじゃないのですけれども、何となくコロナの影響があるのじゃないかと思われるような項目が幾らかあるかと思っておりまして、例えば４番、訪問地域での活動に伴う収入の確保が難しくなったというものとか、いわゆるコロナに伴う地方における経済の停滞との関係とかというところですね。

家族の理解を得るのも難しいというのも、実は、今さっきの感染に伴う萎縮ということになると、関連していることがあるということで、ほかの項目へのコロナ禍の影響というのも、直接出てきていないのですけれども、ちょっと影響しているものがあると思われますので、その辺りは考慮しながらまとめていただくと、もっと見やすくなるのかなと思ったりしました。

以上です。

【小田切座長】　　この点、田中補佐、いかがでしょうか。

【田中課長補佐】　　可能な範囲で検討してみたいと思いますけれども、基本的には、上部の選択肢につきましては、昨年度の選択肢を踏襲しておりまして、１０番のコロナ禍で地域との関係性が悪化したというのは、今年度やるときに新たに追加した項目でございますが、他の選択項目についても確かに読み方によっては、コロナ禍の影響がいろいろなところに分散して回答されている可能性はありますが、一応、設問の選択肢の立てつけとしては、そのような位置づけですので、あとはほかの質問とのクロスをしながら、どこまで分析できるかということであり、明確に回答できませんが、可能な限り、分析できるところにつきましては、分析を進めていきたいなと思います。

【小田切座長】　　岡本委員、よろしいでしょうか。いろいろな形で立体像を究めていただくということをお願いしたいと思います。

ほかにいかがでしょうか。石山委員、お願いします。

【石山委員】　　１１ページの回答で、ポツ３から８番までというのは、ほとんどオンラインでの関わりのアクションになるかと思うんですけれども、今話している１４ページの、継続をする上での阻害要因というものを乗り越えていくために、オンラインでの活動というのがどれぐらい可能性があるのかみたいなクロスの仮説が立てられないかなというのを感じておりました。

【小田切座長】　　これはぜひ御検討いただいて、お願いいたします。前向きな御提案をいただいたと思います。ありがとうございます。

谷口委員、お願いします。

【谷口委員】　　今の石山委員さんのおっしゃったことは非常に重要なので、そこはぜひ重点的に分析をかけていきたいところだなと思っています。

ほかにも参考情報として、こんな見方があるかなと思っていることを、参考までになんですけれども、１１ページ、ちょうど今、石山委員さんが御指摘してくださったところなんですが、３から８はオンラインの話がいろいろあるわけですけれども、２番が訪問が減少したという人と、それから９番が自粛したという方で、合わせて４割ぐらいの方が実空間から、実は消えちゃっているということが、今起こっていると思ったらいいんですね。

これは、全くこのデータとは関係ない、昨日交通系の研究者の方々と意見交換したときに出てきた情報なんですけれども、実は東京都市圏の通勤交通とかというのは、今かなり戻ってきていて、以前のコロナ前の１５％減ぐらいまでに戻ってきているんですよね。それから、郊外のショッピングセンターとか、郊外の駅周辺の買物トリップとかというのも、ほぼ戻っ

てきていると。

けれども、例えば渋谷の人出というのはそんなに戻ってきていなくて、大体コロナ前の４割減ぐらいになっていると。特に興味深いのは、それで平日と土日と安定しているということなんですよね。コロナ前は、渋谷とかは土日にバーンと人が出て、平日はそんなに出ないみたいな感じですけれども、今は平日も土日も同じぐらいの感じで、ずっと４割減の人出になっているんですね。

こちらも４割減で、渋谷も４割減で、そういう勤務とかをするという以外の、どこかスペシャルな場に行くところというのは、今は全部４割減っていると思ったらいいんですけれども、それがこれから戻ってくるんですが、その渋谷に行っていた人たちをこっちにどうやって持ってくるかということが、一つのポイントになるのかなと思っています。交換可能なんじゃないかという要素が結構あると思っていて、そこら辺がこれからの一つの焦点になるかなと個人的に思っています。

以上です。

【小田切座長】　ありがとうございます。４割減というのは随分リアルな数字ですね。体感と一致するような感じもします。

指出委員、お願いします。

【指出委員】　この巨大なサンプルをまとめていただいて、ありがとうございました。事前の説明のときも含めて、ものすごく感動しています。

僕からは１５ページの、関わりの深化の方向性で、８番ですね。今以上の関係性は求めていないというのをネガティブに取るのか、ポジティブに取るのかというところなんですが、僕はこれをポジティブに捉えようとしていて、その場合に、今以上の関係性を求めていない人たちが、三大都市圏からどこに行っているのか、その他の地域からどこに行っているのかを知りたいなというのがあります。

というのは、最近僕は「サイレント・プリフェクチャー」という考え方もあるんじゃないかなと思っているのが、例えば静岡県や群馬県というのは、声高に自分たちの魅力をあまり発信していない印象が僕は見受けられるんですが、実は物価が日本で一番安いとか、子育てに向いているとかで、そこから声は上がってこないけれども、そこに行くことで満足感を得ている人たちが相当にいるんだなということが分かったんですよね。なので、移住や定住は地域づくりの先進地からの強い発信というのも大事なんですが、その声なきマジョリティーがどこに満足度を持って移動しているかみたいなことは知りたいなと思ったので、こ

こはぜひ教えてもらえたらうれしいと思いました。

【小田切座長】　　ありがとうございます。新しい議論を今、教えていただきました。その上で、具体的なデータ分析の示唆をいただいたように思います。

今、指出さんがおっしゃったことも含めて、どの地域に行っているのか、これは市町村単位で把握できるわけですので、前回の去年の分析でも市町村単位の一覧表を出していただきましたように、最終的にはそういう形で示していただけるということでしょうか。

【田中課長補佐】　　今回、全国レベルで、発地も全国ですし、着地も全国なので、どこからどこへのデータを整理するのかについて選択をしないと、膨大なデータになってしまうので、取りあえずは、東京都に住んでいる人がどこから行っているのかというのを、三大都市圏の代表として、まずは分析しようかなと思っていまして、もう一つ、地方部につきましては、ある程度サンプル数がないと分析できませんので、ある程度人口規模があるような地方都市、例えば福岡とか、札幌とか、新潟みたいなところから、どういうところに関わっているのかみたいなところを、取りあえずサンプルとして分析してお見せしようかなとは、事務局としては今現在、考えております。

【小田切座長】　　ありがとうございます。あわせて、着地から見て、例えば前回のデータでも、例えば北海道ニセコ町にある程度のサンプルがあったと記憶しておりますが、今回、北海道ニセコ町にある程度の着地のサンプルがあったとすると、そこがどこから行っているのかとか、そういう分析もしていただくと、意味がありそうですね。そんなこともできるわけですね。

【田中課長補佐】　　そうですね。ある程度関係人口が来ているところであれば、どこから来ているかということを分析しても、有意な結果は出るのかなと思います。着地として関係人口が多く来ているところとなると、実は東京とか横浜とかが出てきてしまうので、そういうところではあまり面白くないので、地方部の、いわゆる地方都市とか、地方の農村漁村集落があるようなところで、ある程度サンプル数が確保できるような着地に着目して分析することは有意義ですし、テクニカル的にも可能だと思います。

【小田切座長】　　ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。

私から改めて確認させていただきますが、この分析は政府として、関係人口の数量的把握が必要ではないかという問題提起が二、三年前からあって、それを昨年、プレ調査的に３万サンプルで行って、しかも今回は全国で１５万という巨大サンプルで行うことになりまし

た。そして、得られた数字が、この９ページと１０ページの数字であり、これは多分、足していい数字だと思いますので、関係人口（訪問型）が国内に約１，８００万人存在している。これはあくまでも１８歳以上居住者ですので、１億人強ということになりますが、その十七、八％が関係人口として把握されて、その実数は１，８００万人。２，０００万近い数字がそのように動いているということ。

それから、特に注目したいのが、直接寄与型ですね。ここが関係人口の中で、特に色合いが濃い関係人口と考えると、これが６２５万人。６００万人を超す人々がこのような形で、非常に分かりやすく言えば、イベントに参加するというよりも、イベントの裏方をしながら地域に関わりを持っているという、そんな方々が析出された。この理解はこれでよろしいでしょうか。つまり、私が言いたいのは、今までと違って、全地域の調査ということがあって、これは足していいんだという、その確認をさせていただきたいと思います。

【田中課長補佐】　　そのように考えてよろしいと思います。

【小田切座長】　　そうすると、今回このように、当然分けて表示するというのが正当なんですが、足した表示もあってもおかしくないということですかね。

谷口先生、いかがでしょうか。

【谷口委員】　　構わないと思います。一応、拡大ベースだけ確認したほうがいいと思います。これ、拡大はかかっている？

【田中課長補佐】　　かかっております。

【谷口委員】　　じゃ、問題ないです。

【小田切座長】　　問題ないですか。そのことを確認させていただきました。

ほかにいかがでしょうか。こういう数字が知りたいとか、もちろん、いかんせん１５万サンプルですので、そのハンドリング自体が大変なので、現実にそれができるかどうかというのは、また別問題なんですが、アイデアを積極的にいただくと、今の段階で大変ありがたいと思います。

多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　　さっき、着地のところが多いところが出せるというお話があったと思うんですが、そういう着地が多い地方の側の、幾つかに共通する傾向とか、そういうのが見えると、ほかの地域がいかにして、関係人口を増やすときにどうしたらいいかというヒントが見えるかもと思ったので、そういうのが幾つか見えるといいなと思いました。

【小田切座長】　　ありがとうございます。これは多分、人口比に直した計算が必要だと思

います。人口比に対して、このぐらいの関係人口がという、その順位ですね。そうでないと、まさに東京、横浜などが多くなってしまうんですが、人口比に直して、例えば繰り返しになりますが、あくまでも例なんですが、北海道ニセコ町、あるいは新潟県十日町市とか、そのように出た場合の共通点は何かという分析は、将来的にはできるということでしょうか。

【田中課長補佐】　　テクニカル的には可能だと思います。

【谷口委員】　　各市町村まで下がったときに、どれだけサンプルがあれば。

【小田切座長】　　本当にそういうことですね。

【谷口委員】　　１５万サンプルあっても、市町村掛ける市町村の組合せでやると、かなり少なくなってくるので。だから、市町村で無理な場合は、傾向が類似した市町村をまとめて、ちょっと丸まった回答になるかも分かりませんが、それぐらいのレベルで。

【小田切座長】　　なるほど。ありがとうございます。

【田中課長補佐】　　よろしいですか。

【小田切座長】　　はい。

【田中課長補佐】　　周辺の市町村を巻き込んで、昔の郡じゃないですけれども、そういうまとめた単位で集計するということは意味があると。

【谷口委員】　　もちろん、ありだと思います。

【小田切座長】　　前回は抽出率２，０００分の１だったと思いますので、１人いれば２，０００人いるということになってしまうんですが、今回は８００分の１でしょうかね。そういう意味もあって、少し違う数字が見えてくるかもしれません。

中島委員、お願いいたします。

【中島委員】　　昨年の調査と、少し質問の項目も変わっているところもあるかなと思うんですけれども、昨年からの変化率のようなところも、見られるものは見ておきたいなと思いました。取れるものはあるんでしょうか。

【田中課長補佐】　　コロナの影響を中に内包してしまっているということが、９ページ目、１０ページ目で説明させて頂いております。よって、昨年度の調査結果と比較することについては、あまり意味がないと考えています。今年度の結果は今年度の結果で、単独で見たほうがよいのかなと。あまりその差分を見て、何か傾向が変わったとか、そういうことを見るのは、質問項目等を変更していることもあり、なかなか統計的には、私は難しいのではないかなと思っております。

【中島委員】　　なるほど。分かりました。

【小田切座長】　　そうですね。例えば９ページでいえば、１８．３と出ている数字は、前回調査は２３だったと思います。そういう意味で、谷口先生が先ほど萎縮したと言うのは、この辺りだと思うんですが、そういう意味で、これを関係人口の割合が下がったとは読めるわけではなくて、調査のある種の癖を反映したものということでしょうか。

ほかにいかがでしょうか。事務局から、ほかの省庁からの皆さんから、これは共有すべきデータだと思いますが、何かありましたら遠慮なく。もちろん国交省からも。

得田参事官、お願いいたします。

【まち・ひと・しごと創生本部事務局】　　大変興味深いデータで、本当にありがたいと思っています。

１５ページの関係人口の関わりの深化の方向性のところで、すごく興味深いのですが、関係人口は、結果として移住があるという考え方ではおるんですけれども、６の移住を考えたいというところにつけてくれた方の、どういう属性の人とかの分析というのは、興味深いなと思っています。

また、この６、問い自体が複数回答可と書いてあるので、移住を考えたいと書いている人が、７と一緒に丸をつけているのか、１から５のグループと丸をつけているのかとか、どこと丸が重なっているのかなとか、そういう分析もあると、今後の政策に生かしやすいのかなと思っておりますので、できる限りで結構ですが、データとかを教えていただければと思います。

以上です。

【田中課長補佐】　　了解いたしました。

【小田切座長】　　関係人口の一種の、私たちは「関わりの階段」という表現をしていますが、階段をステップアップするとするなら、どういう属性なのかという分析ができるということですね。ありがとうございます。

指出委員、お願いいたします。

【指出委員】　　これはデータの中で、もしあればなんですけれども、その地域及びそのエリアに、どのくらいの年数なのか月日なのか、通っているのかということが分かるようなものがあれば、それも知りたいなと思いました。

【田中課長補佐】　　データとして取得しておりますので、関わり年数に関する分析が可能です。

【指出委員】　　ありがとうございます。

【小田切座長】　　課長、お願いいたします。ありがとうございます。

【総務省】　　すいません。総務省ですけれども、９ページ、１０ページなんですが、これら関係人口の方が、逆に何地域に関わっているかというのは、何か出るものなんでしょうか。

【田中課長補佐】　　アンケートの特性上、最大３地域まで答えていただくということになっていまして、何地域でも、それ以上の地域と関わりを持っている方も多分いらっしゃると思いますが、最大３地域まで取っていますので、その範囲であれば、訪問地域数としてカウントすることは可能となっております。

【総務省】　　ありがとうございます。やはり受入れ側としては、１人の方が複数の地域に関わっているというのも関係人口の特徴かなと思いますので、そのようなデータもあるとありがたいなと思いました。

【田中課長補佐】　　はい。

【小田切座長】　　今、角田課長からおっしゃっていただいたのはとても重要で、１地域、２地域、３地域以上という区分ができるということですよね。

【田中課長補佐】　　そうですね。昨年度の調査におきましても訪問地域数ベースということで開示させていただいておりまして、同じような考え方であれば、最大３地域までのところをカウントして、訪問地域数ベースとしてのデータの公表は可能となっております。

【小田切座長】　　属性によっては、例えば、この階層は複数地域に関わっているとか、そういう辺りが分析できたら、これはまた一つの新しい知見になりそうですね。どうもありがとうございました。

　嵩委員。

【嵩委員】　　前提条件の確認なんですけれども、訪問系の場合は、いわゆる地縁・血縁的な、親戚を訪ねるみたいなのは入っていないというのは分かるんですけれども、非訪問系も入っているのか、入っていないのかの確認なんですが、どうでしょうか。

【田中課長補佐】　　質問の意図が……。すいません。

【嵩委員】　　いわゆる血縁、おじいちゃんのところとか、そういったところというのは、関係人口の訪問系の中には含まれないというふうに。

【田中課長補佐】　　現在の関係人口の整理につきましては、昨年度の関係人口の外枠の考え方に基づき整理しております。それが９ページ及び１０ページの赤枠で囲った部分です。昨年度の定義の中では、単におじいちゃんとかおばあちゃんとか、地縁・血縁先を訪問して、特に地域との関わりがないような人たちというのは、一応関係人口からは除いて、予備軍的

な位置づけとして整理しています。

昨年度の定義はそのような整理ですが、この緑の部分を、地縁・血縁的な訪問者も関係人口ではないかという意見を他省庁の方からもいただいておりまして、もう一度そこにつきましては、この懇談会の中で議論をするということとなっておりますので、データが整い次第、次回か次々回になるか分かりませんけれども、この懇談会の中で、この緑の部分を関係人口として含めるかどうかというところは議論したいなと思っております。

【嵩委員】　分かりました。この非訪問系はどっちに含まれるのかなというのが分からなかったので。

【田中課長補佐】　非訪問系は関係人口ですけれども、この赤に囲んでいるところは、関係人口の訪問系というところで赤囲いしているという御理解をいただければと思います。

【小田切座長】　今の御質問は、円グラフでいうと黄色の部分ですね。この中で、例えば地縁・血縁の方々と、訪問しないけれども関係性を持っている。ただ、これは考えてみれば、おじいちゃんに電話した人間が関係人口になっちゃうので、そういう意味では、それから排除しているということですよね。ということだと思います。いかがでしょうか。

それでは、何といっても大きなサンプルだということは、様々な組替え集計ができるという強みがあると思います。なおかつ、実態をかなり反映したものだということで、このデータは大切にしていきたいと思いますので、引き続き分析を深めていただくことを、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、今日のメインテーマに入らせていただいてよろしいでしょうか。

それでは、地域と関係人口の連携・協働した地域づくりの在り方、別の言葉で言うと、地域の内発的発展と関係人口との関係といいましょうか、これを今回と次回にわたって議論を詰めてみたいと思います。

まず、論点整理を事務局からしていただいておりますので、これも小田桐政策企画官から御説明をお願いいたします。

【小田桐企画官】　それでは、資料１７ページ以降になります。私から説明をさせていただきます。

地域と関係人口が連携・協働した地域づくりということで、１８ページから２１ページまで、大きく４つの項目について整理をしております。また、２２ページには概念図も整理しておりますので、こちらも併せて御覧いただきながらと思います。

まず、項目の１つ目でございます。地域と関係人口が連携・協働した地域づくりのイメー

ジということで、関係人口の「関わりしろ」をどのようにつくるのかという点でございます。この点につきまして、委員の皆様にヒアリングをさせていただきまして、「関わりしろ」をつくるということが重要となるという中で、３つほどイメージがあるのではないかということでまとめさせていただいております。

１点目が、地域と関係人口がお互いの弱いモノを交換するような取組ということで、地域と関係人口がお互いに困っていることや不安なこと、弱さをお互いに出し合った上で交換することで、お互いの強さに変換していくという関係があるのではないかと。お互いの弱さを交換するということは、お互い諦めていたが本心では望んでいたものの交換で、等価性の高い交換になるんじゃないかと。そういうイメージが１点目。

２点目が、関係人口にやってほしいこと、一緒にやりたいこと等の棚卸しを地域が行って、地域における役割の受皿をつくり、関係人口と連携・協働する取組ということで、地域が関係人口と連携・協働したいことをあらかじめ整理して、地域の課題を可視化した上で、都市側から地域に関係人口を誘引するということがあるのではないか。また、地域側の視点では価値のないように思われることでも、都市の側の視点ではお金を払ってでも経験したいと考えている人が存在している場合があるのではないかということが、イメージの２つ目でございます。

イメージの３つ目でございますが、つながりをきっかけとして、取りあえず地域を訪れてもらい、一緒に活動（交流）することを通じて、関係人口に地域での居場所を見つけてもらう取組という形もあるのではないかということで、最初からウィン・ウィンの関係性を求めるということではなくて、結果的にウィン・ウィンの関係性を構築するというアプローチもあるのではないかという御意見をいただいております。

２項目め、１９ページになりますが、関係人口を迎えるに当たっての地域の対応ということで、関係人口の受皿づくりをどのように行うのかという点でございます。こちらも大きく３つの柱に分けて整理をしております。

１点目が、地域内外の関係案内人及び中間支援組織が有機的に連携して地域に人を呼び込むということで、特に都市側と地方側の両方の視点で、地域を客観的に俯瞰することが重要と。言わば都市と地方の翻訳者が必要ではないかという御意見をいただいております。

２つ目に、関係人口の取組を地域の人に見せることによって、関係人口に対する地域の理解を醸成することが大事ではないかということで、必ずしも地域全体の合意形成を得るという必要はないものの、例えば地元メディアや行政の広報誌などによって地域に対して情

報発信をすることで、関係人口に対する安心感や理解を向上させるということが大事ではないか。また、関係人口が地域に存在することの効果（メリット）を体感・実感してもらうことが重要ではないかという御意見をいただいております。

また、３点目といたしまして、地域が地域の問題を自分事として捉えていくことが重要ではないかということで、関係人口は単なる労働力ですとかお客様ではなくて、対等の立場で地域づくりを行うプレーヤーということで、関係人口に頼り過ぎないと。関係人口が地域で行っている取組に地域住民が触れることによって、地域住民の意識が変容していくということも大事ではないかという御意見をいただいております。

項目の３つ目、２０ページでございます。関係人口が地域との関わりを深めるポイントということで、地域との関わりを深めるために必要な要素は何かという点でございます。

こちらも大きく３点に分けて整理をしておりまして、１点目、地域づくりにおける関係人口の位置づけを、様々なグラデーションで関わるクリエーターとして認識してはどうかということで、専門分野ですとか得意分野を持つ関係人口というのは、それを生かした取組が可能ですし、特別な能力がなくても、地域への思いですとか興味があれば、地域づくりへの参加は可能だろうと。また、関係人口が地域で果たす役割は、地域住民が果たす役割と同義ということで、地域住民の方の中にも地域への関わりにとって濃淡があるように、関係人口にも地域への関わりに濃淡があっていいんじゃないかという御意見をいただいております。

２点目、地域と関係人口が連携・協働して地域づくりを進めていくためには、地域側のキーマンが必要不可欠ではないかということで、特に、先ほども少し出ましたけれども、キーマンには関係案内人と同様、地域の内外を理解して、それぞれ翻訳できることが求められる。言わば地域の価値観と外部の価値観の双方を理解して、客観的に地域を俯瞰できる人が望ましいのではないかと。必ずしも同一の人物がキーマンを継続することは負担になるケースもあることから、プロジェクトごとにキーマンが入れ替わったり、その分野の得意な人がキーマンになるということが重要ではないかという御意見をいただいております。

３点目に、将来的な移住の可能性がある場合、関係人口に対する地域のモチベーションが向上するということもあるだろうということで、特に人口が減少している集落では、交流から移住につながるという「関わりの階段」のステップアップを目撃させることが重要ではないかという御意見をいただいております。

最後、４項目めでございます。２１ページですが、地域が関係人口との交流疲れ（関係疲れ）を防止するために、地域と関係人口の適切な距離感とはどのようなものかという点でご

ざいます。こちらにつきましても３項目に分けて整理しております。

１点目が、取組の継続性の観点からは、役割を分担するなど、地域側の適度な負担の分散が必要ではないかということで、特に大学からのインターンなんかを事例として考えたときに、インターンを受け入れる市町村が１か所に集中するなど、受け入れる側と送り出す側のバランスが崩れていることが問題になっているケースがあるのではないか。また、地域側の受入体制をネットワーク化して、受入れのインセンティブの異なる人同士が連携して、それぞれの得意分野を生かしながら負担を分散すること、あるいは、受入れを隔年で実施するなどの対応が必要なのではないかという御意見をいただいております。

２点目が、地域は関係人口をもてなすのではなく、地域の豊かな部分をお裾分けするという感覚であることが重要ではないかという御意見で、交流を日常に溶け込ませるなど、日常の延長線として接することが重要ではないかと。非日常が続くことで交流疲れを引き起こすという可能性があるのではないかということで、ソーシャルグッドディスタンスを意識して、地域と関係人口の適切な距離感を探ることが求められるのではないかという御意見をいただいております。

最後、３点目になりますが、地域と関係人口の双方における交流疲れの大きな要因となり得るマンネリ化を防ぎ、取組を常に変化させていくことが重要ということで、受入れに対する精神的かつ体力的な疲れに加えて、同じことを繰り返していると心が弾まなくなるということで、マンネリに対する対応が必要ではないかということで、楽しいイベントが地域住民と関係人口の交流の場になることを発信していくことを通じて、交流に対する垣根を低くしていくこと、また、オフラインとオンラインのバランスを取りながら交流を行うことが重要ではないかという御意見をいただいております。

２２ページは、模式的に整理したものでございます。

最後、２３ページ目に、それらに向けての行政の役割というものを、論点として５つ整理しております。

１点目が、先ほども出ましたけれども、関係人口と住民が行っている取組の情報発信ということで、関係人口に関する理解の醸成をしていくことが大事ではないかと。

２点目が、中間支援的な取組を行っている（役割を果たしている）人へのお墨つきを与えるということで、取組に関する地域住民の理解を得るために、行政がバックアップを行って、中間支援組織等が行う取組を担保することが重要ではないかと。

３点目が、地域維持等の活動を行っている人の労働に見合った補助ということで、経済的

な安定性の確保もまた、活動の継続に重要な論点ですので、３点目をこのように書かせていただいております。

４点目は、関係案内人や中間支援組織に対して初期費用を支援ということで、初期費用につきましては、行政機関からの支援が有効ではないかと。また、行政機関が中間支援組織等と民間企業とのつながりを創り出すことも必要ではないかということを書かせていただいております。

最後、５点目になります。地域づくりのプレーヤー、キーマン等のネットワーク形成の後押しということで、地域づくりのプレーヤーの定期的な顔合わせ、あるいは、ほかの地域のキーマン同士が顔合わせを行うことができる仕組みの構築、これが行政の役割としてあるのではないかということでございます。行政が幹事役となって、同じ感覚や気持ちを持つ人たちを集め、悩みの交換が可能な場を設けることが、一つ行政の役割として重要ではないかということを論点として書かせていただいております。

私からは以上です。

【小田切座長】　小田桐企画官、ありがとうございました。

それでは、この部分を議論させていただきたいと思います。副題に「個別ヒアリングの結果に基づく整理」とありますように、現場に近い委員から、国交省事務局が時間を取ってヒアリングを丁寧にしていただきました。私も多田委員のヒアリングのときに同席させていただいたんですが、かなり事前の下調べと丁寧なヒアリングが行われて、その結果、こういった内容をまとめることができたということです。一つ一つのことは委員各位が発言されたようなことが出てきているんですが、それをどのようにまとめるのか、組み立てるのかというところが一つの論点だと思います。

とりわけ、最後の２３ページの政策のところは、国、都道府県、市町村、それぞれどのような対応をすべきかというアウトプットの部分を最終的に議論できるような、そんな議論ができればと思っております。

それでは、委員相互で確認できていないところなどの御質問から始めて、この組立て、そして最後のアウトプットの政策と、こういった議論をどうぞよろしくお願いしたいと思います。どうでしょうか。事実関係の確認なども含めて。

佐藤補佐から。

【農林水産省】　農水省の佐藤です。議論の前に用語を確認しておきたかった箇所がありまして、キーマンという言葉、関係案内人、地域づくりのプレーヤーという言葉がそれぞれ

出てくるんですけれども、この辺の言葉の関係性がどう違うのか、その辺の整理だけ教えていただければと思います。

【小田切座長】　ありがとうございます。大変重要なご指摘です。それぞれ違うニュアンスで議論していると、議論がかみ合わないということがありますので、ここは確認したいと思います。どうでしょうか。主としてキーマンというものと、関係案内所・関係案内人、これの異同といいましょうか、そこはまず重要な論点だと思いますが。

田中補佐、お願いいたします。

【田中課長補佐】　すいません。改めて資料を見ると、正確に使い分けることができていない部分があると感じていますが、基本的に、関係案内人と中間支援組織というものは、地域の人と関係人口をつなぐような役割の人だと思っていただければと思います。ここに書いてあるキーマンが、基本的には地域の中にいる人で、地域をリードできるというか、制御できるようなというか、そういう人なのかなというイメージでございます。地域づくりを行うプレーヤーというのは、地域づくりに参加している全ての人を指すのかなという理解です。

【小田切座長】　これは恐らく、それぞれの委員が使った言葉をそのまま使っている可能性もありますので、どうでしょうか。ヒアリングを受けた委員から。多分、キーマンはキーパーソンと答えたんだと思いますけれども、この辺りはどなたでしょうか。

指出委員、どのように整理すればいいのかという、ここで出てきているキーマン、キーパーソンと、関係案内人の関係性、これはニアリーイコールでしょうか。

【指出委員】　田中さんがおっしゃってくださったような明確な区分ができるんだろうなと僕も認識していますが、でも非常に微妙な差異だなというのも思っています。なので、ある程度、統一してしまってもいいかと思いますが、例えばキーマンは、さっき小田切座長がおっしゃられたようにキーパーソンのほうがいいと思うんですよね。プレーヤーは分かりやすいと思います。一方でキーパーソンと関係案内人という言葉は、ちゃんと分かれるように説明ができているのであれば、分けておきたいなとは思います。

田中さん、いかがですかね。

【田中課長補佐】　私もニアリーイコールな部分があるとは思うんですけれども、やはりちょっと性質が違う部分もあるなと思っておりまして、できればキーパーソンと関係案内人とは分けたいなと思っています。

【小田切座長】　中島委員、その後、指出委員にお願いいたします。

【中島委員】　　私もここは分けておいたほうがいいなと思っている派なんですけれども、理由としましては、関係案内人の方は、実は移住してこられた方だったりするケースもあると思います。何となくキーパーソンのほうは、地元にいらっしゃる方で、つなぐ役割、より地域の中に入ってつなぐ方ということが、そういう構造になっていることはよくあるのではないかなと思いますので、分けておくイメージがよいかなと思いました。

【小田切座長】　　指出委員、お願いいたします。

【指出委員】　　これはまさに多田さんの池谷集落が、関係案内人とキーパーソンが両方いらっしゃるところだなと僕は思っているので、ちょっと多田さんに振ってもいいですか。

【小田切座長】　　ありがとうございます。

【多田委員】　　関係案内人は外とつなぐ人で、イコールキーパーソンになる人もいるかもしれませんけれども、キーパーソンの人は、例えば地域の中だけでリーダーシップを取っているような人もいますので、その人は外とのつながりは、来たときには「よく来たな」みたいに対応しますけれども、別にその人が外との窓口になることはないので、分かれるんじゃないかと思います。

【小田切座長】　　かなり明確な御説明をいただいたように思います。この辺りの峻別も含めて、今日の議論で詰めていくということでいかがでしょうか。

【田中課長補佐】　　はい、よろしくお願いいたします。

【小田切座長】　　佐藤補佐、ありがとうございました。

それでは、全般的にいかがでしょうか。

私から１点だけ。多田委員からのヒアリングを受けて、ある種の調整がといいましょうか、認識を確認することが必要だなと思ったのが、２０ページの一番下、将来的な移住の可能性がある場合、関係人口に対する地域のモチベーションが向上ということですね。ここは多田委員からお話を聞いて、関係人口が仮に移住するという可能性がある場合には、そのこと自体が地域に対しての大きな刺激や、あるいは支えになるんだと。そういう意味で、しばしば関係人口は、移住を前提としないんだということが逆に強調され過ぎてしまう傾向があると。

ここは実態に応じて考えるべきで、農村部、農村的色彩が強いところは、多田委員のこの御発言のように、そして都市的色彩が強いところでは、そうでないこともあり得るという、そんな峻別でよろしいでしょうか。これは指出委員と多田委員のお二人に聞いてみたいと思いますが。

【指出委員】　　ありがとうございます。僕も全く小田切座長のおっしゃるとおりだと思います。必ずしも移住につながらないケースも多いかもしれませんが、一方で移住につながるケースも多いなという、実は曖昧なんですけれども、それが今の関係人口のありようだなと僕は感じています。

【小田切座長】　　ありがとうございます。

多田委員、いかがでしょうか。

【多田委員】　　２１ページの下に、マンネリに対する対応のお話もあると思うんですけれども、結構地域づくりが、１人、ものすごいリーダーシップを取る人がいて、その人が年取ってくると衰退していくケースがちょっとあったりするんですが、マンネリにならないためにも、関わっていた人が移住したみたいな展開があると、要するに、活動そのものが一歩一歩レベルアップしていっているというのが、地域側もはっきりと分かりますので、続きやすいという意味もありますので、マンネリ化を防ぐ意味においても、関係人口の人が移住する場合があるというのは、すごく大事なことだなと思っています。

【小田切座長】　　岡本室長、お願いいたします。

【岡本委員】　　まず、今の移住と関係人口の話なのですけれども、直接の因果関係はなかなか難しいのですが、ただ、明らかにそういう関係人口の裾野が広がっていくことによって、移住の部分の可能性というか、そういうところは豊かになっていくということはあると思うのです。なかなか数字的に計ることができないので、難しいところなのですけれども。

あと、もう１点は質問ですけれども、２３ページの一番最後のところの、「行政が幹事役となり、同じ感覚や気持ちを持つ人たちを集め」というところですけれども、この役割というのが２つあって、広域的な中間支援団体というのが似合うパターンと、行政というところと、２種類あると思うのですけれども、ここで行政が出てきた場合に、特にどういう役割を期待されているのかというのが、行政側としては非常に気になるところでして、お聞きできればと思うのですが。

【小田切座長】　　いかがでしょうか。前半の件については、それでは、関係人口と移住との関係について整理ができたということが確認されました。

後半については御質問でもありますので、ここの意味合い、これは田中補佐でよろしいですか。あるいは、この辺りを強く御主張された方がいましたら、サポートをお願いいたします。

【田中課長補佐】　　この辺りは、たしか指出さんからいただいた意見だったと思うんです

けれども。違いましたっけ？

【指出委員】　　これは継続的な形でということで、先ほど岡本委員が懸念されているような、すごくストイックな形ではなくて、行政の担当の方がその地域や人の関係性を一番知っているという点で、それぞれのハブになっている可能性が高かったりします。そういったときに、いい意味で、次に誰をその人とつなげたらいいかみたいなことを考えていくと、こういうコミュニティーが集まるような場所を、行政の担当の方がつくりやすいこともあるんじゃないのかなと思って、ここに設けさせてもらいました。

なので、多分、岡本委員が真ん中に立たれたとしても、ただ、それが必ずしもやらなければいけないみたいなものではなくて、もうちょっとノンフォーマルな柔らかい感じで人が集まってくるようなことを、行政の方だとやりやすいのではないかなと思って、その発言をしたと思います。

【小田切座長】　　岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　　ここで行政がよく言われるのが、また担当が替わったということを言われることが多いわけで、結局は行政の方と、地域の中間支援団体みたいなもの、そして地域というコミュニティーが、話ができるコミュニティーをどうつくっていくかということなのかなと思うのですけれども、指出委員、いかがでしょうか。

【指出委員】　　ありがとうございます。この太ゴシックの「地域づくりのプレーヤー、キーマン等のネットワーク形成の後押し」というのが一番大事なところで、その中で、こういう組合せの中から生まれることもありますよと僕は認識していますので、それぞれの細かい条項が目的ではないなと思っています。ですので、岡本委員、安心してください。

【岡本委員】　　ありがとうございます。

【小田切座長】　　ということですね。お願いいたします。

【多田委員】　　今、地域に飛び出す公務員ネットワークとか、結構あったりしますし、カリスマ公務員とか、やる気のある方って、別に仕事だからやっているんじゃなくて、要するに、自分は行政の人と対応するときに、明らかに仕事で、もう次の年度になったら一切、一緒にやった取組について興味を示さない人と、その後もＳＮＳとかでつながっていて、その仕事を、その人はもし担当を離れても、やっていたことを気にしている人とかがいると思うんですけれども、どっちかというと行政が杓子定規に、こういうことをやりましょうというよりは、さっき指出さんがおっしゃったみたいに、本当に人として、関係人口の関係案内人の人とかと関わりながら、外から来る人とかも歓迎していくような、そういった姿勢が求め

られるんじゃないかなと思いますね。

【小田切座長】　　谷口委員、お願いいたします。

【谷口委員】　　ヒアリングを私は受けていない者なんですけれども、第三者的な目から見てという言い方になるか、今の多田委員さんの話に僕も非常に同感だなと思ったのは、１８ページから２２ページまでは、すごくよく分かるというか、いろいろ深掘りされているなと思っているんですけれども、２３ページになった途端に、すごく官僚チックになるというか、ムードががらっと変わってしまうのはなぜなんだろうというのが。すいません。素人目なんですけれども。

そういう意味でいくと、今、多田委員さんがおっしゃったことを違う言い方で言わせていただいているだけかなと思うんですが、一番下のところとかは、行政の方自体が、自分がプレーヤーになったり、自分がキーマンになるという気持ちをぜひ持っていただきたいということなのかなと思うんですよね。そうじゃないと、仕事としてやっていても楽しくないでしょうと思うんだけれども。だから、もうちょっと２３ページの内容を、軟らかくすると言ったらいいのかどうか分からないですけれども、もうちょっと気持ちが入ったような文章にしたほうがいいのかなと思いました。すいません。言葉がうまくないもんで。

もう１点だけ付け加えさせていただくと、全然違うんですけれども、１８ページのところで、これは指出さんがこの前シンポジウムでおっしゃっていたことで、僕はすごく不意を突かれたような気持ちになったんですけれども、弱さの交換という発想ってすごいなと思ったんですが、こういうニュアンスが、２３ページのところでうまく伝わるようになればいいなと思っているんですけれども、それはちょっと難しいかも分からないんですが。

あと、ついでに言うと、この前のシンポジウムで小田切先生がおっしゃった「にぎやかな過疎」というキーワードも、とてもいいなと思って、非常にいいキーワードというのがいっぱいあるような気がしているので、２３ページに全部落とし込むのは難しいと思うんですけれども、そういうマインドみたいなものがもうちょっと入っていけばいいなと、すいません、ヒアリングを受けていない無責任な立場からのコメントです。

【小田切座長】　　どうもありがとうございます。２３ページの書きぶりを少し変えていくというのは、全般的に必要なのかもしれません。逆に受け止めるサイドも、書きぶりを変えたことを受け止めていただかなくてはいけないんですよね。ここはなかなか難しいところなんですけれども、そういうことが将来的には期待されるところです。ありがとうございます。

嵩委員、お願いいたします。

【嵩委員】　多分、１９ページにも２０ページにも関わるところかなと思っているんですけれども、昔、農家民宿に来るお客さんへのヒアリングをいろいろやったことがあるんですけれども、そのときに、こういう農家民宿には行きたくないと言われたのが、独身だということが分かると、途端におかみさんがぎらぎらしたというのがあった。

もう一つ、交流人口を囲い込みたがる地域というか、そういう人がすごくいて、そこら辺を、流動するというのを許容するような意識を少し持っていかないと、多分この辺が、いずれ定住してくれるんじゃないか、移住してくれるんじゃないかというモチベーションとのギャップというのがあるのかなと。意識が変わることは重要なんですけれども、それが結果的に、移住してくれるんじゃないかという期待があまりにも多くなり過ぎると、どうしても囲い込みたがる。逆にそれによって離れてしまうというのをずっと見てきているので、その辺りは少し、どういう表現をするのか、私はまだイメージが湧かないんですけれども、議論したいなと思います。

【小田切座長】　多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　今のを伺っていて、営業の人が押売すればするほど逃げていって、これは何と言ったらいいんですかね、がっつかないことが大事だというのは、確かに要素として入れておいたほうがいいのかなと思いますね。「結果的に移住した」というのが良いと、だから移住はゴールではないと言ってもいいかもしれないですけれども、結果的に移り住むと、いいですよという、そういう感じかなと思うんですよね。多分、それがないと、結局、年寄りばかりになって、そこが消滅してしまえば関係人口も何もないわけですから。

【小田切座長】　これは地域おこし協力隊にも関わることですが、関係人口の現状の多様性、将来的多様性、それについての理解をお互い深めるということでしょうかね。いろいろな可能性があるんだという共有化がされることによって、一方的にこうならなくちゃいけないというプレッシャーをかけないということ。それをどう表現したらいいでしょうかね。

じゃ、岡本室長。その後、石山委員、何かありましたらお願いいたします。

【岡本委員】　今の話を聞いていてというのと、実感値なのですけれども、囲い込んで、込まれて移住してくるというよりは、積み重ねられて結果的になっているということが、移住につながるつながりとしては、ぴったりなのかなという感じがしますね。重なっているうちに、ほっとけない感が出ていって、何となく気がついたら移住していたというのが、結構多いのではないかなと思っていたりします。

【小田切座長】　　ありがとうございます。

多田委員。

【多田委員】　　そしたら、行政の政策みたいなところに当たるかと思うんですけれども、そういうちゃんとした知識というかリテラシーを、普及させるという役割も必要なのかなと思うんですね。

【小田切座長】　　今のリテラシーという言葉がいいかもしれませんね。関係人口リテラシーというか、存在の多様性と動向の多様性について、しっかりと意識をするという、まさにリテラシーですね。ありがとうございました。

全般にいかがでしょうか。これもオープンに議論したいと思いますので、遠慮なくいろいろな方々から。

佐藤補佐、よろしいですか。ありがとうございます。逆にいろいろな各省庁から御発言いただくのがありがたく思います。

【農林水産省】　　農水省の佐藤です。資料全体を拝見させていただいて、タイトルは「つながりの創出」というタイトルなんですけれども、恐らくこのつながりについて、因数分解して考えると、創出という場面と拡大や深化という場面に分かれるのかなと思います。

全体的にこの資料は、どっちかというと創出というよりは、拡大や深化の部分が中心で書かれているのかなという印象を持ったんですけれども、じゃあ、創出に向けて何が要るのかと考えたときに、今、我々の検討会でやっているような内容が関係してくるのかなと思ったので、その紹介を兼ねてお話しさせていただければと思うんですけれども、恐らく関係人口の深化を図る段階というのは、既に関係人口がいて、そこから先の話だと思うんですけれども、そもそもそういうものが全くいないというところについて、創出に向けた取組となってくると、最初から関係人口づくりをしていくというよりは、まず地域活動、地域づくりをしていって、地域活動の場があってというところをやっていくんじゃないかなと理解しました。

まさに今、我々は新しい農村政策の在り方検討会というのをやっているんですけれども、検討会では、地域づくりに取り組みたいんだけれども、地域への目配りとか、地域の話合い、ワークショップの場をつくったりとか、そういうことについて、どうしていいか分からない自治体職員をメインに対象として据えた、人材育成研修を検討しています。研修は来年度からスタートする予定なんですけれども、そういう職員を育成していって、今度、育成された職員のネットワークもつくっていこうということをやっています。

恐らく我々の議論も、すごく関係人口の話に関わってくるのかなと思っていまして、そういう地域づくりをやっているところというのは、次に関係人口の創出というステップに向かいやすいんだということだとすると、我々の育成していく地域づくり人材が、地域づくりで何か地域の課題に取り組んでいく際に、今の地域内の人たちでは足りないなとかいう場面が出てきたときに、次に関係人口という発想があるんだとか、そういうところを教えていかなきゃいけないんじゃないかという感想を持ちました。なので、ここで出ている論点とかを持ち帰らせていただいて、どう連携できるのかというのを相談していく必要があるなという感想を持ちました。

以上です。

【小田切座長】　ありがとうございます。各省連携、関係人口をめぐって、まさにそれぞれの政策資源を出し合いながら進めておりますので、大変ありがたく思います。

今の御指摘は多分、Ⅲ－１、Ⅲ－２という、これからⅢ－２のつながりの創出を議論するんですが、Ⅲ－０というのがあって、地域づくりそのもののスタート段階といいましょうか、それがあるということにもなろうかと思います。今議論しようとしていることを、少し動態的にといいましょうか、プロセスで議論するとどうなるのかという組立てが必要ではないかという御意見だと思います。

田中補佐、どうぞ。

【田中課長補佐】　先ほどあった、創出の部分があまり議論されていないんじゃないかというところは、Ⅲ－２以降、２４ページ以降で論点として挙げておりまして、こちらについては、関係人口と地域が連携・協働した地域づくりの在り方の議論が終わった後に、具体的に議論していくのかなと思っております。

先ほど小田切先生からあった、そもそも地域づくりとは何なのかというⅢ－０が要るのではないかということなんですけれども、昨年度の４月まで実施しておりました「住み続けられる国土専門委員会」というのが、国土審議会計画推進部会の下にあったんですけれども、それは小田切委員長が座長となっていまして、議論してきたんですけれども、その中で、内発的発展のプロセスデザインというのを整理しているところでございます。

このプロセスデザインは、あらかじめ地域側が考えた上で、関係人口といかに連携・協働して地域づくりを進めていくかというプロセスを明示したものでございますけれども、地域づくりは、そのプロセスに従って行うものだけなのかという疑問がお話を聞いているうちに出てきました。プロセスデザインの拡充というか、追加というか、選択肢を増やすとい

うことが必要なのかなと思っていますので、そちらについては事務局で検討いたしまして、次回懇談会に提示したいなと思います。

【小田切座長】　　ありがとうございました。それでは、そのようにお願いいたします。

中島委員、お願いいたします。

【中島委員】　　私から、１８ページのイメージ２の受皿づくりのところにあります、地域側の視点では価値のないように思われるものでも、都市部の視点ではお金を払ってでも経験したいと。この辺りの領域、ここのポイントについては、今、ちょうどワーケーションであったりとかということで、企業が積極的にワーケーションを推進するような話も出ておりますし、企業によっては、ぜひ行くだけではなくて、地域に積極的に関わりなさいと。そういった地域のコミュニティーの中に入っていける方法を考えていきましょうと推奨している企業も、大分増えてきています。

そういう、行く都市部側の企業も背中を押し、都市部側の行く人も押されて、行けるようになってきているという部分で考えますと、よりこういった受皿になるような仕組みであったりとか、場づくりみたいなものは、すごく可能性が出てくると思いますし、恐らくお金を払ってでも経験したいというふうに、その時間をどのように過ごすのかというのを考えていく人が増えてくるだろうなというのを、最近すごく実感しておりますので、この辺りはぜひ、私たちもうまく考えたいなと思っているところでした。

【小田切座長】　　まさに新しい動きを御指摘いただきました。これはそうですね、石山委員、お願いいたします。

【石山委員】　　すいません。別の観点なんですけれども、２３ページの行政の役割というところで、結構これを見ると、全く新しいことを全部やらなきゃいけないんじゃないかという印象をすごく受けるんですが、実は一番大事なものというのは、今の役所の中で、既存の政策と関係人口をどう結びつけるかということが、最も行政マンの役割として大きいんじゃないかなと思います。

例えば、市役所の中にある観光課とか、交通政策課だったりとか、移住政策、あとは創業支援課といったところと、実は担当課がやっていることは関係人口と結びつけられるんだよ、一緒にコラボしませんかというプレーヤーが行政内に必要ですし、そういった結びつきをどのように組み立てるかというところが、まさに重要なんじゃないかなというところで、岡本さん、何か事例があれば教えてほしいです。

【岡本委員】　　先ほど中島委員からワーケーションの話が出てまいりました。ワーケーシ

ョンは確かに言われるとおり、地域の受皿をつくるということがとても大切なのですね。地域の受皿をつくる。

そしてもう一つは、都市部の企業様のニーズ、どういう関わりを持ちたいのかということであります。それをつかまえて、また今度はそれを持ち帰って、中でそれをどこの部署であるかというところが受けるということで、鳥取県はワーケーション・コンシェルジュと言っているのですけれども、コンシェルジュの役割って、もともとはどちらかというと、民間企業さんとの調整が多いのかなと思っていたのですけれども、実際やり始めると、内側の調整のほうが多いのですよね。

内側の、例えばこれは観光なのか、企業の立地課なのかというところであるということが一つ。もう一つ、先ほどから飛び出す公務員とか、いろいろ話が出てきまして、私もちょっと刺さるとか、いろいろと痛い部分があるのですけれども、いわゆる公務員というか、そこのプレーヤー自身が自ら地域や行政内でのネットワークとかが豊かであると、またそこの選択肢が広がっていくということで、そういった辺りも、役職の人は１人だと継続性がないので、その周りに、庁内でもそういったものを語るコミュニティーみたいなものがきちんとしていたり、それを支える人が元職であったりしてもいいのかもしれませんけれども、そういうのができていると、地域を、そこを核にして関係人口の広がりとかができやすいと思っております。

【小田切座長】　ありがとうございました。自治体職員の在り方のような議論が、最終的には出てくるのかもしれません。

ほかにいかがでしょうか。論点としていないようなもの、あるいは、これとこれを組み合わせるべきではないかとか、そんなものでも構いません。

１点、これはワーケーションのことも含めて、率直に意見交換してみたいんですが、実は大学のインターンというんでしょうか、あるいはインターンまでも行かなくて、地域に調査に入って、そして最終的には発表会を行う。こういったところでしばしばトラブルがあります。トラブルがあるというのは、上から目線でこうしろああしろという、こういうのを我々はインターン公害といって、地域からも問題提起されております。

それにある段階から気がついて、私たちの実習は、上から目線ではなく横から目線だ、むしろ自分たちの体験・経験を伝えるということにしようというふうに変えて、それから大分、地域との関係性も変わり始めたんですが、ワーケーションが上から目線で、言わば都市部のエキスパートがああしろこうしろといったことになりはしないか、そこに公害が発生しな

いかどうかということは、常に気にしているところなんですが、一種の交流疲れの一環ですが、ここら辺りはいかがでしょうか。まず実態と、あるいは実態に対しての対応策。

多田委員、経験などはございますか。インターン公害の。

【多田委員】　そうですね、こういう例でいいますと、どっちかというと、地域の人からしたら、「それは分かっているよ」という内容が多くて、でも人手が足りないからできないとか、そういうことが多いから、提案だけされるという関わり方というのが問題で、それが上から目線なのか横からなのかというよりは、どちらかというと、提案だけされても意味がないなというのを、多分２回、３回経験すると、感じる対応ですね。それが実態に近いのかなと思うんですけれども。

【小田切座長】　こういう関わり方についての問題がありそうですが。

【多田委員】　なので、逆に言うと、一緒に汗をかいて、農作業を一緒にやるとか、そういう人たちはすごく喜ばれるんで、我々がインターンを受けるときは、１人の人が１か月とか１年とか、一緒になって汗を流すという形式で、その中で何か気づいたことを提案するというのが、どっちかというと、提案というよりは発表で、こういうことを体験して、こういう学びがありましたとかというほうが喜ばれるとか、あと、何か動画を作ってくれて、上映会をしたら喜ばれたとか、そういうのがありますね。

【小田切座長】　中島委員、いかがでしょうか。

【中島委員】　私たちのほうでも、既に取り組んでいる地域の方とか、もしくは行かれた方のお話をいろいろ聞いている中でいいますと、何となく、何もないところにぽんと行くと、先ほどの多田委員がおっしゃられたような、ちょっと上からみたいな発言に、結果的になってしまう、もしくは責任が持てない、短期的なお話で終わってしまうということが多いんですけれども、逆にある程度、始まりがあって終わりがあるような、そういう関わりみたいなものがうまく見つけられたりとか、もしくは、ちょうど今、テレワークを始めようとされる地域が増えてきていますので、そういう地域の中で何が必要なのかということを、１週間なり１か月滞在して、それをアウトプットするという、都市部の人たちならではの関わり方を見つけていく、もしくはそれをお願いするというような関係性をつくれると、うまくいっているようなケースもあります。

【小田切座長】　ありがとうございます。

岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　２つありまして、やはり一番は、短期の滞在の中での大きな課題解決だと

出されて、これをやったらみたいな部分で、それで終わってしまうという、いわゆる関わりと提案との間の関係というのがあると思うのですが、やはり関わりをつくっていってという形がありますので、長期滞在していくというのもありますし、今、オンラインもあるのですけれども、どうやって関係性をつくっていってというのと、後になって関わるのか、関わらないのかというところと、例えば受け入れる行政側であれば、地方にきて、いきなりすごい提案をして、幾らかかるのと言ったら、億単位ですと言われて、おいおいみたいなケースがあるわけなのですよね。

だから、同じ目線に立てているか、この人たちは結局、どこまで関わろうとしてくれるかという信頼感の問題だと思うのですよね。以前の懇談会のときに中島委員さんが言われた、課題解決じゃなくてもったいないというところだというのは、そこに寄り添った視点じゃないかなと思っているところです。

【小田切座長】　ありがとうございました。継続性ということが重要ですね。継続的に関わるというのを、関係人口の中でキーワードとしても出ておりますが、そこが重要だということですね。ありがとうございました。

もう少しこの論点をめぐって議論をする時間がありますが、いかがでしょうか。

多田委員、お願いいたします。

【多田委員】　継続性の部分でいうと、知的な関わり方で提案とか、そういう大きいこととかは、やはり継続性がないとあれですけれども、本当に目の前で草刈りを手伝うとかは、単発でも全然いいというか、そういう関わり方の種類によって、その継続性の必要性も変わってくるのかなという気はしますね。

【小田切座長】　ありがとうございます。なるほど。

お願いいたします。ありがとうございます。

【藤田総合計画課長】　２３ページでございますけれども、なかなか評判が悪いんですが、正直申し上げて、我々のほうとしても、国が直接関わる部分ではなかなか少ないと思いますけれども、市町村とかが関わっていくというものについて、あまり行政が口を出しても、するものでもないと思っているんですけれども、ここに５つぐらいは書いていますが、行政に対して皆さん方が、どなたかでも結構ですけれども、どういうことを行政には求めて、むしろ自分たちでやらなくちゃいけないことはどういうことなのかという、むしろ行政に求めるものは何なのかと言われたら、どういうことを言われますでしょうかというのを、ちょっとお聞きしたかったんですけれども。

【小田切座長】　　いかがでしょうか。

じゃ、まず多田委員から。あと、ぜひいろいろな方々、お願いいたします。

【多田委員】　　一応、現場の人の中に、関係人口に詳しい人と詳しくない人とかの差が大きいので、ちゃんとした情報とか、その流通というか、進んでいるところじゃないところを引き上げるようにしていくような情報の普及とか、そういったものは非常に重要になってくるのかなと思います。

【小田切座長】　　よろしいですか。その前に、情報の共有化のために行政ができることがあるということですね。

【多田委員】　　はい、そうです。

【小田切座長】　　岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　　行政は一番究極的に言うと、入る人、そして地域の人への安心感の保障という機能だと思うのですよね。ですので、地域の中にネットワークをつくってもらうにも、外から人が来てもらうにも、そこに安心感が必要であるということで、行政が関わること、そして行政が主体的に動いているということは、ここに入っていいという安心感ができるということだと思います。

あと、当然施策的な、進めていく上において、お金が必要であることというのもありますので、そのお金とか、そういったリソースを準備することというのが、行政の求められている役割ではないかなと考えております。

【黒川大臣官房審議官】　　関連して、ちょっとよろしいですか。

【小田切座長】　　審議官、お願いいたします。

【黒川大臣官房審議官】　　昔から行政に求めるのは金と人だというのがありましたけれども、今のお話で、加えて、地域の溶け込み方の連結点になるということだと理解しました。

一方で、１０年ぐらい前までに市町村合併が大分進んでいます。合併前であれば、市町村の出先の所長さんなどは、かなり現場に溶け込んでおられて、もしくは地域の御出身だったりしていました。

その後、広域合併がこれだけ進んでくると、本庁の担当は、地域に縁もゆかりもない方になってしまっていて、地域の支所もそれまでのようなマンパワーがなかったり、担当も異動で地域外の方と入れ替わってきているというケースが、市町村についても、大分多くなってきていると思うんですね。

じゃ、県庁さんはどうかというと、こちらも大分人員の縮減などが進んでいて、出先が、

どうも失礼な言葉ですけれども、弱体化してきている。このような中で、行政も引け腰になってきている面が否めないと思います。その辺、日頃活動しておられてどうかとか、鳥取県さんはどうカバーしているのかといった辺りを聞かせていただければと思います。

【小田切座長】　　それでは、まず多田委員から、合併市町村である十日町市での実感と、それから鳥取県の事例、それぞれお願いいたします。

【多田委員】　　やはり無駄な仕事が多いんじゃないですかね。書類が多いとか、会議が多いとか、時間がないのは結局そこで、例えば議会対応が忙しいとか、別にそんなのは、本当は議員がちゃんと自分で答弁を考えたらいい話であって、だから、そういう無駄が多過ぎるということが問題ではないかと思います。それをどう改善しろというのは、ちょっと分かりませんが。

【小田切座長】　　つまり、合併市町村でも、そういったことで十分、支所単位で対応できるものがあるということでしょうかね。そういう余裕が生まれてくるはずだと。

【多田委員】　　そうですね。だって、個人個人の行政の人で、やる気の高い方なんかは、やはり御自身で動いていらっしゃいますので、別にできないわけではないと思うんですよね。

【小田切座長】　　それでは、岡本委員、お願いいたします。

【岡本委員】　　なかなか答えにくいご質問が来ましたので、取りあえず、それはそれで置いておきまして、これだけ行政も小さくなりまして、各地域、特に地方組織ですね。市町村とかであれば、例えば鳥取市とかの事例でいうと、９つの市町村が合併し、その上で当然、地域の支所とかに置かれる人は少なくなっているということで、これまではどちらかというと、その支所長がハブになって、全部プレーヤーにもなれるというのが、これまでの大きな流れだったと思うのですけれども、逆に、今実際に動いているのは、そういった支所長クラスの方ではなくて、３０代とか４０代とか、比較的若い職員の皆さんが動いておられるという形だと思うのですよね。

そういう中で、恐らく多田委員からも、そういう意味があって、もっと地域に職員が出ていって、ネットワークをつくっていくべきだということで、どちらかというと、今、地域を実際に動かしているというのは、３０代、４０代、もしくはそういう積み重ねを持った、ネットワークを持った公務員の方が動かしているという面があるかと思います。

ですので、そういったものをどうやってつくっていくかというのも一つの課題だと思いますし、例えば高知県さん、地域支援企画員ということで、たしか県庁の中で職員を割り当

てて、あなたはこの町の地域支援企画員ですよという形で充てているというところがあります。あれも実を伴うかというものもあるみたいなのですけれども、高知県さんとかは、その地域支援企画員さん同士で勉強会とかも開いておられて、割と私が聞いている限りでは、きちんと動いているなという印象を持っています。

やはりそうやって地域を、ネットワークをどうやって持っていくかという職員を育てていくというのも、一つの役割になってくるのではないかなと思っております。

【小田切座長】　　それでは角田課長、お願いいたします。

【総務省】　　そういう行政とのつなぎと地域のつなぎという意味では、多田さんの前であれなんですけれども、地域おこし協力隊という制度を設けております。この制度が、だんだんと行政が合併等で、行政職員が地域から遠くなっているところを補うために、ある意味、ある制度かなと思っています。ですので、地域おこし協力隊、それから集落支援員といった方々という制度を設けていますので、そういった方々と行政職員がうまく連携すれば、こういう関係人口の取組なんかも進んでいくんじゃないかなと思いますので、一言ちょっと宣伝させてもらいました。

【小田切座長】　　ありがとうございます。

じゃ、中島委員の前に、そうですね、地域おこし協力隊、集落支援員のことが、ひょっとしたら２３ページの中にも書かれていておかしくないんですよね。そのことはそのとおりだと思います。ありがとうございます。

中島委員、お願いいたします。

【中島委員】　　今の地域おこし協力隊の方と、役所の担当の方の連携という部分でいいますと、私たちのＳＭＯＵＴというサービスを使っていただいて、うまく活動できている自治体さんは、その形でやられています。まさに自治体の担当の方が監督もやって、マネジャーもやって、雑務からプレーヤーまで全部やっていたところから、その分を分業するということを協力隊の方にやっていただいていると。細かなコミュニケーションは協力隊の方がやっていくという、その分業制がすごくうまくいっているところは、私たちのサービスでもすごく成功されているので、ここの分業が成功につながるというのは、一つ成功事例として証明できるところかなと思っています。

【小田切座長】　　どうもありがとうございました。また、その事例なども教えていただければと思います。ありがとうございます。

いかがでしょうか。藤田課長からのご意見があって、まだ議論していないのは中間支援組

織。この中間支援組織の在り方ですね。関係人口との関わりでの中間支援組織の在り方。ともすれば、これさえ言っておけば、何かいろいろなことを言っているという気持ちになるのが昨今なんですが、関係人口論的に中間支援組織というのはどうあるべきかという、この議論はいかがでしょうか。そして、そこへの政策はどうあるべきか。ここではお墨つき、あるいは初期費用支援というのが出ておりますが、ほかにはありますでしょうか。

角田課長。

【総務省】　総務省でもモデル事業を、関係人口はやっているんですけれども、中間支援組織というものを非常に重視して、それぞれ取り組んでくださいということを言っているんですが、モデル事業が終わった後、その中間支援組織が回っていくのかというところが、一番の問題なんじゃないかなと思います。したがって、初期費用というのもあるんですけれども、回っていくような仕組みをつくっていくということが必要なんじゃないかなと思います。

関係人口の取組で、うまくいって回っている取組としては、例えば棚田の支援みたいなものがあると思います。一口棚田ということで、一口で入ってもらって、その方々が田植をしたり、稲刈りをしたり、その分の報酬じゃないけれども、お米をもらって、労働と釣り合うような形で、うまく回っているケースというのはありますので、そういう回っている仕組みというのができるといいんじゃないかなと思っています。

【小田切座長】　ありがとうございました。

中島委員、お願いいたします。

【中島委員】　ちょうど私が今日持ってきた資料３の１１ページ目を御覧いただきたいんですけれども、まさに中間支援組織が自立して回っているケースというのを、今日持ってきております。福井県の鯖江市のＮＰＯ法人エル・コミュニティという団体と、その代表の竹部さんという女性の取組です。竹部さんの団体は、この３つの鯖江市の地域活性化プランコンテストでリーダーの育成をし、学生団体をつくり、地域の担い手を育成して、さらにＩＴの担い手育成ということで、子供のプログラミング教室みたいなことをＳＡＰさんにサポートいただきながら、Ｈａｎａ道場というものを運営されています。

次のページ、１２ページ目に、どのような自立のスキームになっているのかというのを私なりに書いたものであるんですけれども、実は彼ら、彼女たちは、鯖江市からの助成というか費用は、話を伺っていると、１５％程度と聞いています。どのように運営しているのかといいますと、東京であったり県内外の企業からの金銭的な支援だったり、人的だったり技術

的な支援を受け、都内だったり県内の企業は、鯖江という場所、そしてこのエル・コミュニティという団体がつくる事業をベースに、ＣＳＲであったり研究開発だったりをやっていくというスキームでやっています。

都内であったり、東京だったり、都市部のお金をしっかり鯖江に持ってきて、鯖江の中で地域の人がその事業に関わり、この事業が面白いので、都市部の人たちも関わっていくというような、そういうスキームがぐるぐる回っていまして、お金の切れ目が縁の切れ目にならないという関係をつくっております。

何といっても、私がこの右側にある地域外の人たちの本人でもあるので、今日、すごく眼鏡のマークをいっぱいつけてきているんですけれども、私が関係人口で、このパターンでどはまりして、ここにいるというところもあるんですが、この自立の仕組みというものは、最初からこういう事業にしていこう、こういう流れにしていこうということを考えてつくり上げて今に至るということがありましたので、まさに初期費用からサポートしてもらって、あとは何とか考えようという考え方だと、多分自滅していくような形になっていくので、最初の事業計画というものが、すごく重要になってくるんだろうなと思いました。

【小田切座長】　ありがとうございました。中間支援組織の在り方も、少しずつ見えてきたように思います。ありがとうございます。

それでは、ここの部分も次回にさらに議論する余裕がありますので、そのようにさせていただければと思います。

それでは、大変恐縮ですが、議論を先に進ませていただきまして、地域と関係人口のつながり創出というところですね。資料は最後のところになりますが、ここの部分につきましては、実は岡本委員と中島委員からの御報告と資料を用意していただいております。順番は、岡本委員、中島委員の予定だったんですが、既に中島委員が中身をお話しされていますので、中島委員、岡本委員の順番に変えさせていただきます。

それではお願いいたします。

【中島委員】　分かりました。時間を見て。

では、資料３を御覧ください。まず、今回４つ持ってきていますが、先ほど１つ御紹介しましたので、３つ御紹介します。

まず１つ目ですが、空き家をコミュニティースペースにするための仲間を、私たちの移住スタートサービスのＳＭＯＵＴで募集しているケースというのを御紹介します。岡山県の井原市の大舌さんという女性、この黄色いお洋服を着ていらっしゃる方なんですけれども、

駄菓子屋さんで空き家を地域のコミュニティースペースにしたいということで、ＳＭＯＵＴで募集をかけていただいたと。これで興味があるというアプローチをしてくれた人が４３名いました。

どんな仲間募集をしたかといいますと、このスペースをつくりたいので、この空き家をまず壊すところから手伝ってもらえませんかという、非常にハードルの低い、多分私でもできるような呼びかけ方をしてくださったというところでございます。それがきっかけで２組の方が参加して、このときには参加できなかった４３名の方々は、その後のプロジェクトでまた関わりになったと聞いております。

３ページ目ですね。これがどういうものなのかというのを少しまとめておりますけれども、人と場所と仕組みという中で、いかに地域と都市部の人が互いに参加しやすく、ハードルが低く、愛着が湧くかというところが、すごく重要なのかなと思います。先ほどの事務局のページの中にも、結果的なウィン・ウィンという話がありましたけれども、まさにこれは最初から、お互いのウィン・ウィンを考えていたというよりも、結果的によかったよね、参加してよかった、来てもらえてよかったと思えるような仕組みがつくれたということかなと思っております。

次のページですね。４ページ目、２つ目の事例でございます。こちらは先ほど少し触れましたけれども、ワーケーションの実験をされている自治体さん、もしくは地域が増えてきております。これもＳＭＯＵＴというサービスで募集していただいたりしているんですけれども、今回は気仙沼の移住・定住センターＭＩＮＡＴＯの千葉さんの例でございます。

この取組は、どんなことが気仙沼に、ワーケーションのためには必要なのかということを、とにかく洗い出したいという思いが千葉さんの中にあったと聞いています。ちょうど震災の１０年というタイミングと、ボランティアで関わってくださっていた方に戻ってきてもらえる場所をつくりたいというのを、このワーケーションにかけたと伺っています。

この結果、こんな写真が５ページ目に出ていますけれども、４名の方が参加されて、気仙沼の旅館はＷｉ－Ｆｉがばっちりだったとか、意外と気仙沼の市街地のＷｉ－Ｆｉよりも、旅館の島のほうのＷｉ－Ｆｉがばっちりだったとか、あと、部下にちょっと優しくなれましたとか、それまでに仕事を終わらせようとして、すごく仕事に集中できましたみたいなお話もある反面、交通費という問題だったり、滞在費だったりという問題を全員がつまびらかにするときに、やはりそんなに簡単にいかないよねということも、実際のいい話だけではなく、大きな課題みたいなところも表面化させることができたと聞いております。

６ページ目を御覧ください。実は参加された４名のうちの２名は、関係人口の方でした。震災のボランティアなので、女性が２人、それぞれ関わられたんですけれども、どうしても仕事がないので移住に至らなかったということだったんですが、千葉さんがこの２人に、ぜひワーケーションの実験に参加してほしいということで尋ねたところ、ぜひ参加しますということで、参加してくれたということです。１人の女性は会社の仲間を連れてきてくれて、さらに関係が深まったと聞いております。

これはどういう仕組みかというのを７ページ目に考えております。私のこのスライドの結論的に言いますと、新しい生活様式に関して、いろいろな地域であったりとか自治体で検討が始まっていると思いますけれども、過去の事例がなかなか生きにくくなっている中、いろいろな実験を皆さんがしていくときに、関係人口、これまでのつながりみたいなものを、うまく活用していくというのがよいのではないかなという御提案になっています。

地域を１、２、３、４とぐるぐるしているものがありますが、１番で場の提供というもの、ミッションの提供みたいなものを地域側が行い、２番の自分ごと化、実験に参加というところを、関係人口側が「関わりしろ」を見つけて参加できるようになってくるということで、この流れを新しい生活様式でできたらいいなと考えました。

最後に行きます。８ページ目です。これは先々週の日曜日にオープンしました、福岡県八女市さんと弊社、面白法人カヤックの利用者で取り組んでいる話なんですけれども、ここでお話ししたいのは、偶発的な出会いを生み出す場としての取組としております。

八女市はもう３年ほど、カヤックは実はつながりを持って、一緒に事業を検討していきましょうということで、３年がかりでようやく、まず今、形になってきているわけなんですけれども、９ページにありますように、八女のつながるバス停ということで、多くの人が毎日利用する日常の場所を、つながる場所にしていくということと、バス停をつくるだけではなくて、本棚を中心として、しおりを使って、人と人の距離をさらに縮めていく。そういったキーアイテムを入れていくということを弊社で御提案させていただいて、八女市さんと一緒につくることができました。

あと、１０ページ目ですね。これがどういう考え方に、今後も含めてなっているかといいますと、ステップ１として、バス停を起点に、新たなつながりを創出していこう。そして、地域の顔を増やす。しおりとかをうまく活用していきながら、地域にこんな人たちがいるんだ。そして、外から入ってくる人を、コミュニティー通貨というものでつながりをつくっていくということをして、より活性化させていくことを、場を使ってやっていこうと思ってい

ます。ステップ３が、「つながるフニャララ」というつながりの仕組み、このもの自体が、八女のオリジナリティーということで発信されていくような世界観をつくり、八女をさらに魅力的にし、かつ、つながりたいと思う人たちを増やしていこうと考えております。

これは全て、偶発的な出会いを生み出す場があるがゆえに、あそこに行けば誰かに会えるという状態をつくれるということは、指出委員が前回もお話しされていたと思うんですけれども、すごく私たちもそこは共感しておりまして、八女でやらせていただいているという形でございます。

私の報告は以上です。

【小田切座長】　　ありがとうございます。いずれも非常に興味深い事例です。

指出委員、後でまたこれを少し全体的に見て、解説といいましょうか、それもお願いしたいと思います。

それでは、引き続きまして岡本委員、御発表をお願いいたします。

【岡本委員】　　資料を２つめくっていただきまして、いんしゅう鹿野まちづくり協議会の報告がございます。すいません。中島委員さんみたいに整った流れになりませんが。

いんしゅう鹿野まちづくり協議会は、昨年の総務省の関係人口創出・拡大事業に採択いただいたところでございますが、もともと有志によるボランティアグループづくり、つまりはキーパーソンたちが立ち上げた組織ですよね。それで自分たちの、鹿野というのは２年に一度、大きな祭りがある地域でございまして、その祭りに似合うまちをつくっていこうということで、ずっと活動されているということです。

鹿野の地域自体がいろいろな古民家とかがありまして、通りも風情があるんですけれども、そこをゲストハウスであったり、交流拠点であったりというふうにつくっていかれたということと、あと、中心となる人たちというのがいろいろな地域とかに自分が講演で出かけていって、結果的にまたそこのノウハウを持ち帰っていくという流れをつくっていること。フィールドワークにつきましては、割と、例えば大阪国際大学さんとか、継続的な流れで受け入れていく。継続的な流れになれば、その段階によって関わることが増えていくという状況をつくっておられます。あとは資料を見ていただければと思います。

続けて、もちがせ週末住人さんの例ですけれども、こちらは、もともとは鳥取環境大学という鳥取の公立大学にいる起業部というところの学生さん２人がつくったんですけれども、プレーヤーはその起業部の学生さん、そして呼んだのは、その地域の用瀬という、古くからの宿場町ですけれども衰退している地域の方が、こちらがいわゆるキーパーソンですね。こ

ちらの方が声をかけて、活動を始めたということで、ここの活動自体はゲストハウスを拠点に、大学生たち、最初は同じく鳥取環境大学の学生さんが中心になったのですけれども、そこから県外の学生さんたちとつながる活動を行っていくという形でございます。

ポイントは、県外出身の２人の学生がきっかけになっていましたので、大学も県外出身者の多い県内大学ということで、他地域から見た地域と、その地域と、２つの視点を持っておりますので、その辺りから、地域の魅力というものを発信していく。そして、それが学生視点で、またほかの各地域からの学生を巻き込んでいくという形になってきます。それが地域の行事とか、地域のワーキングホリデー、ここは主に、地域の魅力を探してきてくださいというワーキングホリデーが多いです。それとか交流とかで、地元や他地域の人と交流することで、そこで関係資本というのができていくということでございます。

ここがさらに同窓会組織という形で、「週末住人ｓ」ということで、それで来た人を、学生さんたちですので、同窓会型の組織にしていくという取組になっております。あと、新型コロナを受けておりまして、やはりここも今は実際に会うという活動ができないので、その辺りはオンラインを使って補完していくという活動がなされていくということでございます。

めくっていただきまして、最後、これは最近の事例なのですけれども、鳥取市中心市街地の遊休不動産を再生いたしました、まるにわのマーチングビルというところの分でございます。

まず、株式会社まるにわという組織なのですけれども、もともとは地域の衰退している百貨店、昔、百貨店の屋上というのは子供たちにとって遊園地のような夢の場だったのですけれども、それが全く人けがないというか、ビアガーデンにしか利用されていないような土地、場所になってしまったところに、もう一度そういう集まりをつくろうと、芝生の庭をつくろうというプロジェクトからスタートいたしました。これがまた、皆さんが複業でしている方ばかりの集まりでして、皆さんそれぞれのスキルを持ち寄って、そういう団体をつくっていくという形でございます。

先ほど、地域とか外から行く場合に、まず地域をつくっていくというか、動きがというのが前提にあるよねという話があったのですけれども、今回リノベーションしたのが民藝館通りという、鳥取は民工芸が盛んな地域でございまして、その美術館等がある地域にございます。そこにある古い陶器屋のビルを今回リノベーションしたのですけれども、リノベーションに向けて２年間かけて、地域の魅力とか、そこで働いたらどうなるか、そこで暮らした

らどうなるかというワークショップとかをされてきたということでございます。

まずはそうやって県内の、地域内の人たちを、そこの場所の関係人口として巻き込んでいくという取組が行われたと。次のステップとして、これまたですけれども、実はここのメインパーソンたちが、オンライン関係人口未来プロジェクトの関わりでございまして、そこのオンライン関係人口上でここの構想について、皆さん、ちょっと意見を下さいという形で、まずはオンライン上でいろいろと議論を行ったと。毎回少しずつ、今こういう状態でという話を共有していったと。

そして、実際に行ってみようという話になりまして、２週間みんなで体温を測って、１日２日置きにはオンラインで顔を合わせて、みんな健康管理しているよねというのをやってから、実を言いますと９月１９、２０に、実際に６名の方に来ていただいて、これも何をしたかというと、ここを見ていただいたら分かるのですけれども、壁塗りをしていただいた。そして、それをまたオンラインに戻って、その経験とかを共有していただく。その結果、１１月はばらばらになるけれども、また何人か行こうかとか、ぜひこの場所を使って、新たなプロジェクトを立ち上げていきたいとかという動きにつながっているという例でございます。

以上、３例ほどですけれども、紹介させていただきました。

【小田切座長】　　どうもありがとうございました。

それでは、今から２０分ほど、この課題を議論することができます。具体的なミッションといいましょうか、枠組みをお話ししますと、資料１、先ほど小田桐さんに使っていただいた資料ですけれども、例えば２７ページとか２８ページ。これは次回に使う資料なんですが、次回に使う資料も今回こういう形でまとめてありますが、こういうところをさらに豊富化するための論点を出していただくということになります。

今、お二人の委員から御報告をしていただきました。その中で、こういうことが注目されるのではないかとか、ほかの地域でも同じようなことがあるよとか、そういった議論をしていただくと、このところが深まっていくということになります。

ということで、まず指出委員から、御発言をお願いしてよろしいでしょうか。

【指出委員】　　遅くなりました。ありがとうございました。中島さんも岡本さんもそれぞれの立ち位置で、委員としての御発言をされたなと思っています。

僕の感想ですけれども、中島さんのＳＭＯＵＴの、関係人口として地域に入っていく上での形の在り方としては、ワーケーションの体験者のなるべくサンプリングが欲しいなとい

うところで、ワーケーションがワーケーションバブルにならないためには、こうやってしっかりと歯にきぬ着せぬことを言える人たちが、関係人口として地域に意見が言えるという立ち位置は、まさにお互いにそのまちをつくっていくプレーヤーとしての対等な立ち位置なんじゃないかなと思いました。

つながりを偶発的につくるという意味で、バス停という八女のプロジェクトも、とても面白いと思います。まだ始まったばかりなので、これからどういう人が現れるのかとか、どのくらい八女市の人たちはそれに興味を持つのかなというのは、少し気になるところではあります。楽しみです。

岡本委員がやっていらっしゃるものに関しては、今度は関係人口を迎える地域側がかなり主体となっているところだなと思いました。実際に鳥取の鹿野にしてもそうなんですけれども、もともとやっている地域づくりやまちづくりの先進の地域だということを存じ上げておりますので、そこで何かをやっている人たちが関係案内人なのか、キーパーソンになるのか、そういった形で表れているという意味では、新しく関係人口の施策をやるというよりも、これまで積み重ねてきたものを、どう関係人口の議論にシフトしていくかという意味で、非常にそれは多分、アップデートかつリノベーションされた、地域づくりをリノベーションしたんだなと思います。

これはお隣の県の話になって恐縮なんですが、松江市が最近、すごく面白いことをやっていて、松江の市民のみんながやりたいことや実践している取り組みを提案して、それに対してオンラインで関係人口のみんなに仲間になってもらうという「ａｎｄ　ＹＯＵ」というプロジェクトを始めました。そうすると、現れるんですよね。自分から自発的にお父さんや娘さんたちが、自分たちのまちの金物横丁をリノベーションして、その場所に関わる人たちを実はもういっぱい集めているけれども、この先、自分ではない人にここを引き継いでもらったりするときに、じゃ、どうしたらいいかみたいなアイデアをオンラインで募集する形を取ったりしています。

なので、実は外からやってくる関係人口というのが現れることも大事なんですが、その町や市の中に、この前も関係人口全国フォーラムで、小田切座長とETIC.の宮城さんと話をしましたけれども、無関係人口、無活動人口みたいな人たちはごまんといるわけですよね。その人たちが、自分たちのまちは面白いなと思うようなことを誘引・誘発するのは、関係人口ができる、結構な得意技だったりするので、そういったところも含めて多分、つながりという言葉の中に含めておくといいかなと思いました。

【小田切座長】　ありがとうございます。見事に整理していただいて、ありがとうございます。

今のように整理していただいた上で、それぞれ御質問なり、あるいは論点の提起などございますでしょうか。

石山委員、お願いします。

【石山委員】　次回の論点として、ぜひ提示をしたいなと思っているのが、関係案内人の信頼の物差しというものを、どう提示するかということを議論すべきだなと思っておりまして、県人会とかを含め、これまでの信頼の物差しというのは、例えば年が年配かどうかとか、大企業に属しているかどうか、行政のお墨つきがあるかどうか、そういったものが、この人は安心かなという信頼の物差しに、どうしてもなってしまっていたと思います。

それが、今御紹介いただいたような、例えばＳＭＯＵＴさんのような事例だったりとか、比較的、関係案内人が大学生とか若い世代だったりとか、これまで言われていたような物差しの経緯がなかったとしても、信頼に値する人だということは、やはりオンラインでの活動の実績であったりとか、パーソナリティーということが見えるからこそ成り立つのかなと思います。

今後、地域にそれを実装していく、ないしは地域の受入れ側が関係案内人を信頼していくということを考えると、もっと信頼の物差しで、何をもってこの関係案内人が信頼できるのかということの物差しの提示を、ここで議論するということは非常に重要なんじゃないかなと思いました。

以上です。

【小田切座長】　極めて重要な議論ですね。ありがとうございました。物差しの質が世の中で変わり始めているということを共有化した上で、この議論をぜひ次回、深めてみたいと思います。

ほかにいかがでしょうか。谷口委員、お願いします。

【谷口委員】　中島委員さんの八女のつながるバス停を拝見していて、いろいろ思い出したことがあるんですけれども、次回の議論で、場をどうするかという話があったときに、小田切先生に最初お誘いいただいた住み続けられる国土の委員会のときの、小さな拠点という議論があったと思うんですけれども、交通結節点というのが非常に重要な要素になってくるなと感じています。

非常にローカルな話で申し訳ないですけれども、八女だと、これは中心拠点の福島地区で

すね。

【中島委員】　　そうです。

【谷口委員】　　ということは、路線バスは堀川バスですね。八女は合併自治体なので、いろいろな福島地区のような小さな拠点が結構あって、福島地区であれば地域活性化の取り組みとして、多分、人形のお祭りをやっていますよね。そういうところとか、あと、奥へ行くと黒木という拠点集落があって、そこは堀川バスの拠点ターミナルで地元の子供たちの絵を集めて人がたまることができる場をつくっています。そういう小さな拠点群の中心となる交通結節点をうまくつなげられますね。

そういう意味で、場を横串に刺していくという発想みたいなのも、交通結節点を軸にした考え方でいくと、結構つながりを構築できるところがあります。これが、車で行っちゃうと、あまりよくないですね。大型ショッピングセンターとかにぱっと行っちゃうと、人は多いんですけれども、そこでこういう工夫した場にはなかなかなりづらいので、そういう意味では、やはり公共交通とかに、ちょっと歩いてもらって乗って、交流できるような場づくりみたいなものが、非常に大事になってくるのかなと思ってお話を聞いていました。

そういう意味では、岡本委員さんがおっしゃった用瀬のところも拠点になり得るかなと思ってお聞きしましたというので、すいません、コメントでございます。

【小田切座長】　　ありがとうございます。公共交通でつなげるという、特に関係人口論的な視点の場合には、それが重要なんだというのも、非常に新しい視点ですね。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。それでは嵩委員、マイクをお持ちですね。

【嵩委員】　　先ほどの物差しの話を、ずっと前々から議題というか、友人たちとの議論の中でも話はしているんですけれども、ただ、ソーシャルキャピタルに近いかなと個人的には思っていて、それを多分、関係案内人が両方持っている。なので、ブリッジ型のつながりとバインド型のつながり、これを両方持っている必要があるのかなと個人的には思っています。

なので、よく建築だったのでお話しするのが、一人一人が三角スケールを持っていたほうがいいと。三角スケールという三角定規があって、１５０分の１だったり、２５０分の１だったり、面を変えると尺度が変わるというのがあるんですけれども、そういう三角スケール的なものがあって、その時々によって尺度を使い分けるほうがいいんじゃないかなという、そんな冗談めかした話はしているんですけれども、その辺り、ソーシャルキャピタル的な両

方の視点を持っている人というのは、多分重要なんだろうなと思います。これが通訳とか翻訳をできるような人なのかなとは思います。これは多分、議論は次回ですね。

【小田切座長】　関係案内人の外から見た物差しと内側の物差しという、多分そういう議論だと思います。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。指出委員、お願いいたします。

【指出委員】　ありがとうございます。谷口委員がおっしゃられた八女のバスの話につながるんですけれども、今年の７月に新潟の上越市に、良品計画さんが世界最大級の無印良品をオープンさせたんですね、直江津店を。そこはもともと頸城自動車さんが持っている大きなデパートメントストアだったんですけれども、撤退されて空いている場所に良品計画が入ったんですが、良品計画が入る１年くらい前から、実はそこのスタッフ、広報の皆さんをはじめ、大勢の方々が地域に行って、地元の人との対話をずっと繰り返していたんですね。中山間地域も含めて、高田地域も含めて、そうやって地域の人との関係をしっかり深めていった上でオープンをさせている。

なので、最初からゼロスタートというのではなく、はるかマイナスのスタートのところから地域に関わる形を、あれだけの大きい会社がやっている。なので、企業によるワーケーションの仕組みも大事なんですが、実はそうやって関係人口のロジックで地域に入っていくような方法を、良品計画は行っていたというのがあります。

そこから実はプロジェクトが生まれて、もう使っていない頸城自動車のマイクロバスを行商車にして、良品計画のカレーとか化粧水とかをいっぱい載せて、頸城自動車のもともとのバスの路線を８月から走らせるようになったんです。課題もまだ多いんですけれども、でもそういったことを、オープン前の事前から上越の直江津に関わり出した良品計画の若い人たちのグループが自発的にプランを組み立てて、それを地元の交通会社の頸城自動車さんとしっかりと形にしたので、これも関係人口の好例なんじゃないかなと思いました。

【谷口委員】　よろしいですか。

【小田切座長】　谷口先生、お願いします。

【谷口委員】　良品計画さんは、実は茨城県の常総市でもやられていて、常総市というのは洪水を３年前にやったところなんですけれども、学生インターンで、用瀬のようなパターンで考えてくださっているので、割と面的にやられているのかなと思いました。

コメントだけです。

【小田切座長】　非常に示唆的なお話をいただきました。ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。あと一、二の御発言をいただければと思いますが。よろしいですか。

多分、場の重要性、そして場の仕組みの重要性ですね。あるいは、そこに張りつくような人の課題といいましょうか、それをどのように外からの物差しで測っていくのか、内側の資質、内側の物差しでどう考えていくのかという話が、一連の議論として出たと思います。

それでは、事務局で今の議論をまたまとめていただきまして、今回の資料１をさらにバージョンアップして、次回に御提案していただければと思います。よろしいでしょうか。

【田中課長補佐】　　はい。

【小田切座長】　　それでは、取りあえず議題的なものはこれで終わりますが、全体を通じて言い残したことなどがありましたら、ぜひこの場でお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

それでは、事務局から補足的な情報を最後にお願いしたいと思います。

【田中課長補佐】　　ありがとうございました。次回につきましては、来月、１１月１０日に開催したいと思います。

本日、委員の皆様並びにオブザーバーの各委員の皆様から、いろいろと御意見いただきました。関係人口の実態把握についてなんですけれども、最終的には全ての意見を反映して、できるものとできないものが当然ございますので、できるものには対応いたしまして、基本的に公表資料に、年明け２月ぐらいの公表を目指していますけれども、公表資料には入れていきたいなと思っております。

しかしながら、次回の懇談会が１１月１０日ということで、２週間しか時間がございませんので、そこで何が提示できるかということなんですけれども、前回の懇談会の中でいろいろと御議論していただきました、就労型の細分化、具体的には、地域の企業で働いていたり、農林水産業に従事している人と、テレワーク、ただ単に東京とか都市部の仕事を持って地域で仕事をしているだけのテレワークをしている人というのは、なかなか性質が違うのではないかという話がございまして、そちらの区分の見直しとか、少しお話が出ましたけれども、単に帰省をしている人も関係人口ではないかということを、以前オブザーバーの省庁の方から意見をいただいたということもございますので、そういうところの議論に資する資料を次回の懇談会には提出いたしまして、皆様でベースになる部分をしっかり固めた上で、今日いただいた意見の部分の詳細な内容を詰めていくという方針で対応させていただきたいなと思います。

地域と関係人口の結びつきのところでございますけれども、こちらについても多くの意見をいただきまして、これらの意見につきましては資料に反映して、次回の懇談会の中でお示ししていきたいと。論点につきましても、改めてお示ししたいなと思っております。

内容につきましては、小田切座長と相談の上、皆様に事前に御提示をさせていただく予定でございます。

事務局からは以上でございます。

これをもちまして、第３回ライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会を終了いたします。本日はお忙しいところ、どうもありがとうございました。

―― 了 ――